笠利町文化財報告書（9）

下山田Ⅲ遺跡（東地区）

1988年3月

鹿児島県大島郡笠利町教育委員会

遺構検出状況

3号高床倉庫跡

序　　文

新奄美空港建設に伴う発掘調査が毎年のように行われ，そのたびに新発見の遺物出土の報告が行われております。我笠利町はこうした遺跡の多い町として知られております。文化財保護と開発を協調させるうえでも今後の文化行政の当面する課題のひとつとなっております。今回の下山田遺跡の発掘調査は隣接する新奄美空港の近くにあり，周辺が道路拡張され，その地形を変えて来ました。こうした中で開発に先だち，調査が行われたことは意義深いものと思います。

調査に地元の方々の協力と県文化課の職員，鹿児島女子大学三木靖教授，沖縄県文化課金武正紀氏，そして文化庁から松村恵司氏の三名の先生方には現場に来て頂いて御指導を頂き感謝致しております。

今回も先史奄美に新発見の資料を加えております。このような熱心な作業で奄美先史時代解明の手がかりを得たことはよろこばしいことです。

本書が今後とも埋蔵文化財に対する認識と理解，さらには学術研究上の一助になれば幸いです。

発掘期間中には地元の方々の御協力を頂きました。また関係・各位の皆様方にも心からお礼を申し上げます。

昭和６３年２月２９日

笠利町教育委員会
教育長　染　　光義

例　　言

1．この報告書は笠利町教育委員会が文化庁と鹿児島県の補助を得て昭和62年度に実施した下山田Ⅲ遺跡（東地区）の報告書である。

2．下山田Ⅲ遺跡の遺跡名については各地区ごとの調査が行われており，今回は砂丘東側にあたるので，東地区と遺跡名に（　）書きした。

3．現地において松村恵司氏（文化庁），三木靖氏（鹿児島女子大学教授），金武正紀氏（沖縄県教育庁文化課）の指導・助言を得た。

4．本報告書の執筆分担は宮田と中山が行い，本文の最後に記入した。

5．現地での実測は宮田・中山が行い，遺物・遺構の写真撮影は中山が担当した。

6．挿図の遺物番号と図版の遺物番号は統一番号である。

7．断面図に使用したレベル数値は，万屋集落近くにある基準杭から引いてきたものを使用した。

目　　次

第１章　調査の経過 …… 6
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 6
　第２節　調査の組織 …… 6
　第３節　調査の方法と経過 …… 6

第２章　位置と環境 …… 8
　第１節　遺跡の位置と自然 …… 8
　第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　調査の概要 …… 12
　第１節　遺跡の層序 …… 12
　第２節　縄文時代の遺物 …… 12
　第３節　グスク時代の遺構と遺物 …… 16
　　１．検出遺構 …… 16
　　掘立柱建物跡 …… 16
　　高床倉庫跡 …… 24
　　柵列状柱穴群 …… 26
　　炉　跡 …… 26
　　製鉄遺構 …… 27
　　２．出土遺物 …… 28
　　１．土器 …… 28
　　２．類須恵器 …… 30
　　３．滑石製品 …… 30
　　４．貝製品 …… 30

第４章　まとめ …… 33

挿　図　目　次

第１図　奄美大島の地図 …… 8
第２図　遺跡周辺地形図 …… 9
第３図　周辺遺跡分布図 …… 10
第４図　土層柱状模式図 …… 12
第５図　土層断面図 …… 13～14
第６図　縄文時代の石器 …… 15
第７図　１号掘立柱建物跡 …… 16
第８図　遺構分布図 …… 17～18
第９図　２号掘立柱建物跡 …… 19
第10図　３号掘立柱建物跡 …… 20
第11図　４号掘立柱建物跡 …… 21
第12図　５号掘立柱建物跡 …… 22
第13図　６号掘立柱建物跡 …… 23
第14図　１号高床倉庫跡 …… 24
第15図　２号高床倉庫跡 …… 25
第16図　３号高床倉庫跡 …… 25
第17図　柵列状柱穴群 …… 26
第18図　炉跡 …… 26
第19図　製鉄遺構 …… 27
第20図　製鉄遺構内出土遺物 …… 27
第21図　出土遺物実測図（土器） …… 29
第22図　出土遺物実測図（類須恵器） …… 31
第23図　出土遺物実測図（滑石製品） …… 32
第24図　出土遺物実測図（貝製品） …… 32

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 11
第２表　１号掘立柱建物跡計測表 … 16
第３表　２号掘立柱建物跡計測表 … 19
第４表　３号掘立柱建物跡計測表 … 20
第５表　４号掘立柱建物跡計測表 … 21
第６表　５号掘立柱建物跡計測表 … 22
第７表　６号掘立柱建物跡計測表 … 23
第８表　１号高床倉庫跡計測表 …… 24
第９表　２号高床倉庫跡計測表 … 24
第10表　３号高床倉庫跡計測表 … 25

図　版　目　次

図版１　上，遺跡近景（北側から）下，道路反対側から …… 35
図版２　上，土層断面，下，土層断面（手前は１号高床倉庫のピット） …… 36
図版３　上，東面方向土層断面，下，深掘り断面 …… 37
図版４　上，１号掘立柱建物跡，下，２号掘立柱建物跡と１号高床倉庫跡 …… 38
図版５　上，３号掘立柱建物跡，下，４号掘立柱建物跡 …… 39
図版６　上，２号高床倉庫跡検出状況，下，３号高床倉庫跡 …… 40
図版７　上，ピット内の貝，下，高床倉庫ピットの貝と礫 …… 41
図版８　建物跡群 …… 42
図版９　上，製鉄遺構検出状況，下，遺構掘り下げ状況 …… 43
図版10　縄文時代の石器 …… 44
図版11　フイゴの羽口 …… 45
図版12　上，鉄さい，下，布目圧痕文土器 …… 46
図版13　出土土器（下は裏面） …… 47
図版14　出土類須恵器（下は裏面） …… 48
図版15　出土類須恵器（下は裏面） …… 49
図版16　上，滑石製品，下，貝器 …… 50
図版17　調査風景 …… 51

第1章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

下山田遺跡は洪積世台地上に形成する古砂丘から新砂丘にわたって縄文時代の遺跡と12～13世紀の遺跡が所在する。古砂丘に立地する部分（道路西側）は道路拡張工事等のため発掘調査がすでに行われている。今回調査された東区は現道路の東側にあたり，この部分だけが独立した砂丘状になっていた。道路工事で開発され，また新奄美空港で開発されたためである。地主から宅地として整地したいとの申し出があり，調査終了まで待って頂くことにした。

遺跡の西側では縄文時代の遺物や遺構が多数出土し，また東地区でも縄文時代の遺物が表採された。このため国，県の補助を受けて1987年９月18日～10月23日まで発掘調査が行われた。

第2節　調査の組織

調査主体者	笠利町教育委員会	
調査責任者	笠利町教育委員会教育長	染　光義
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	中山清美
	鹿児島県教育委員会文化課	宮田栄二
事務担当者	笠利町教育委員会社会教育課長	前田篤夫
	笠利町歴史民俗資料館	中山清美
発掘作業員	川畑忠美，泉　忠洋，川畑逸郎，川口善三，東田輝巳，東田ミネ子，川畑映子，川畑ミキエ，川畑チズ，川畑良子，川畑ヲサエ，山下ミナエ，坂下よちこ，坂山浩春，牧野和美	
整理作業員	坂山浩春，牧野和美，西真一郎，高瀬孝子，松元雅子，浜田幸江	

なお調査企画において，県教育庁文化課長吉井浩一，同補佐川畑栄造，同主幹森田齊，同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長立園多賀生，同企画助成係長浜松巌氏等県教育庁文化課の指導・助言を得た。

現地調査中は，文化庁文武技官松村恵司氏，三木靖氏（鹿児島女子大学教授），金武正紀氏（沖縄県教育庁文化課）の指導・助言を受けた。

第3節　調査の方法と経過

発掘調査は雑木の伐採から始まりソテツは地主の境界として植え付けられたものもあり，そのまま残すことにした。ただしトレンチにかかる部分はぬき取りを行った。トレンチは道路と平行に設定し，５ｍおきに北から１，２，３……１９，20とし，西からＡＢＣ……とグリット名を付けた。セクションはＢラインの南北と東西の１，３，11で図面に記録した。

遺物は１～11のＡ～Ｄ区の北側部分にだけ確認され，Ａ，Ｂ，Ｃ－19のトレンチやＡ－１３，14，15区，Ｃ－18区では遺物，遺構の検出はなかった。遺物，遺構が集中した北側は多数のピットと四本柱などが確認されており，奄美では初めての掘立柱建物跡，高床倉庫（四本柱）の発見となった。以下は調査の日誌抄である。

９月18日（金）　雑木伐採を行う。

9月19日（土）　雑木伐採を行う。ソテツは残す。
9月21日（月）　器材搬入，発掘前の写真。
9月22日（火）　器材搬入，トレンチ設定。
9月23日（水）　トレンチ設定。
9月24日（木）　東西トレンチ試掘。
9月25日（金）　第3層が遺物包含層である。遺物が出土し始める。
9月26日（土）　雨天のため作業中止，歴民館にて図面点検。
9月28日（月）　南側にもトレンチ設定，ソテツの抜き取り。
9月29日（火）　A－3，B－2，B－3，4，5区の調査，遺物出土。
9月30日（水）　移植ゴテで作業を行う。出土遺物多し。
10月1日（木）　B－2，3，4，5区出土状況を平板測量。
10月2日（金）　A－4区より滑石製品出土。
10月5日（月）　出土遺物の写真，図面。
10月6日（火）　A－4区，層序を確認するため掘り下げる。「下山田遺跡だより」を発行して見学者に配布。学校にも配布。
10月7日（水）　C－2区調査。図面1／20で行う。
10月8日（木）　セクションベルトの取りはずしにかかる。
10月9日（金）　南北セクションも図面終了。
10月12日（月）　北側B－2，3区。C－2，3区実測。
10月13日（火）　ピット状遺構を確認する。
10月14日（水）　C－2区のピット状遺構内住居としての可能性があり，また今後も確認されそうであることから掘立柱建物1と記録する。小学生多数見学。
10月15日（木）　4本柱1号を確認。ピット状遺構を掘る。台風接近のニュースあり。
10月16日（金）　台風のため現場は休み。歴民館にて出土遺物の確認を行う。
10月17日（土）　台風の後始末。集石遺構の調査。
10月18日（日）　沖縄県文化課金武氏来訪。現場は休み。資料館にて指導を受ける。
10月19日（月）　文化庁松村氏，鹿女子大三木氏，沖縄県文化課金武氏三人から現場での指導・助言を得る。
10月20日（火）　写真，実測を行う。
10月21日（水）　掘立柱建物跡，四本柱建物跡の実測を行う。
10月22日（木）　ピットを掘り下げ，実測を行う。
10月23日（金）　すべての実測を終了する。器材かたづけ。
10月24日（土）　器材をかたづける。

歴民館に器材を運び，その後埋めもどしを行った。遺物は歴民館と姶良町にある県文化課収蔵庫へ運び水洗い，注記，実測などの整図，原稿作成などの作業を行う。（中山）

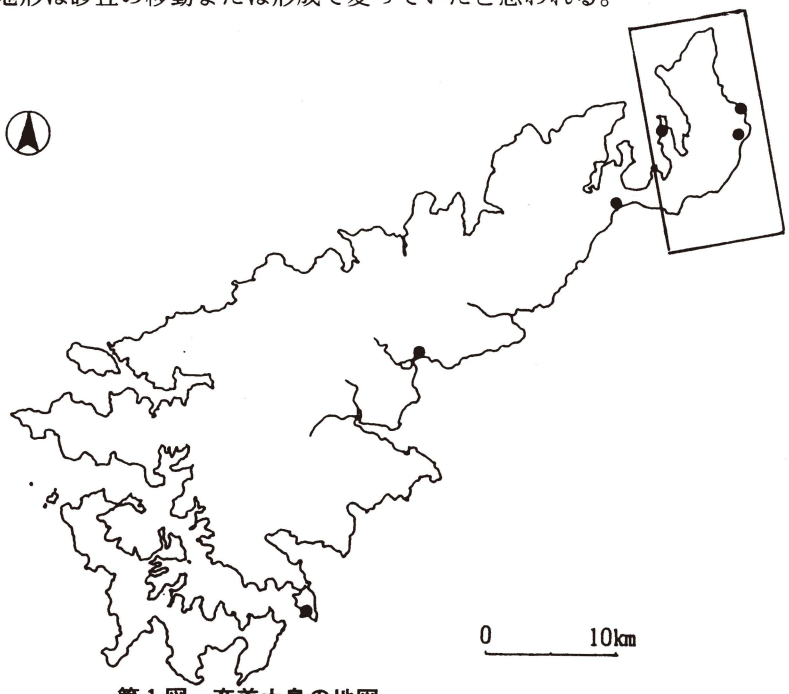
第2章　位置と環境

第1節　遺跡の位置と自然

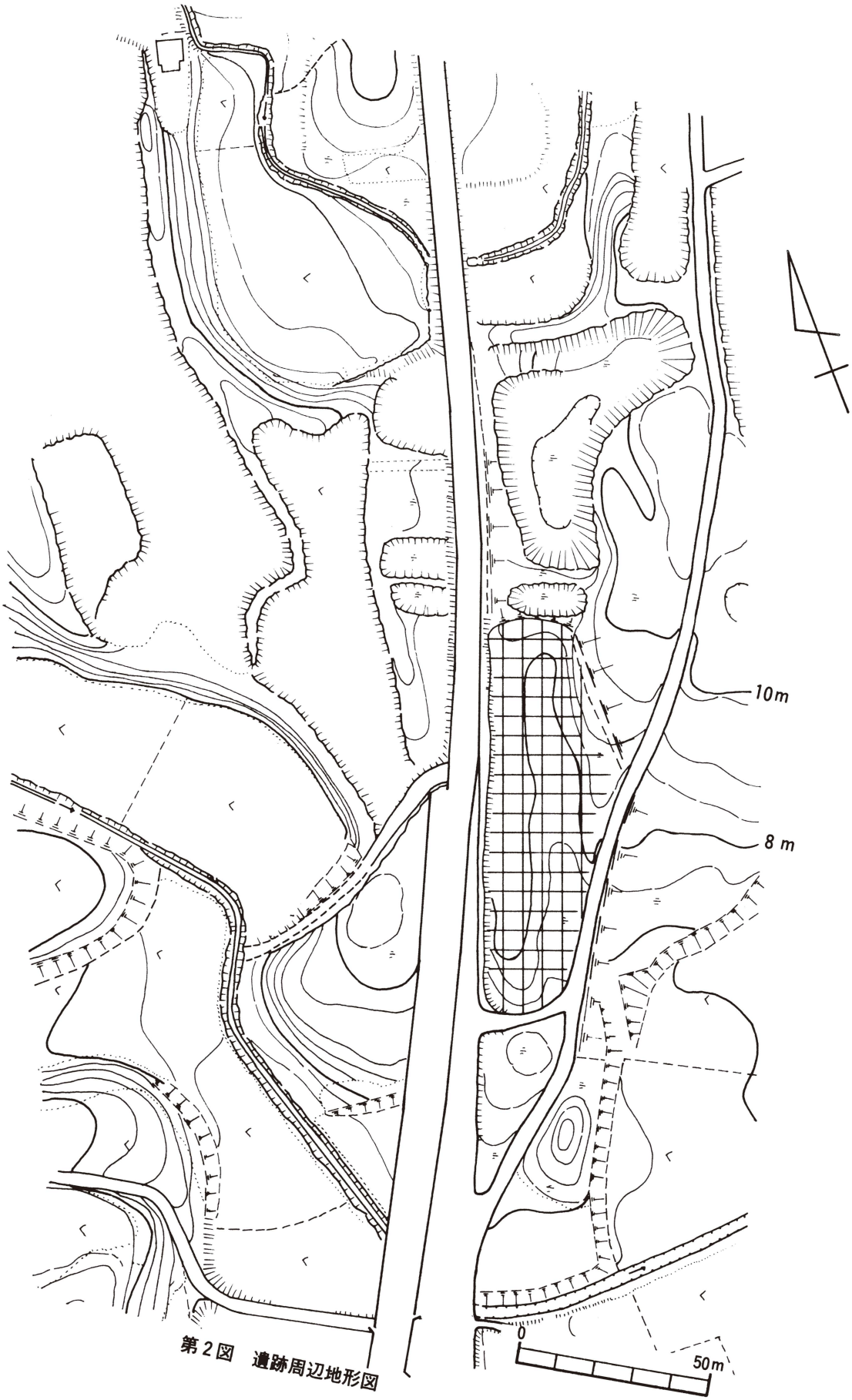
下山田遺跡は笠利町万屋字下山田にある。下山田遺跡の立地する東海岸は奄美でも遺跡の多い地区として知られています。笠利半島の東海岸最北端の用岬から竜郷町赤尾木までの砂丘はほとんどが遺跡である。特に下山田遺跡周辺は小規模遺跡が多く立地している。注1)。下山田遺跡は発掘調査が3回地区を別にして行われており，今回行われたのは一番東側に位置する砂丘である。現県道を境にして東西に分かれているが，県道西側砂丘が1，2地区，今回は県道東側の3地区にあたる。

遺跡は雑木で覆われており，この部分だけが独立した森のようであった。モクマオ，トベラ，シャリンバイ，オオハマボウなど成長の比較的早い木が多かった。このような雑木の伐採を終えた後，ソテツが多く残っており，近年まで畑として使われていた。ソテツは境界として植えられたり，食糧としても活用されていた。雑木で覆われる以前はソテツで境界線をつくり防風垣兼食糧として利用されていたことがわかる。このような姿の畑地は奄美各地で戦後まで多く残っていた。

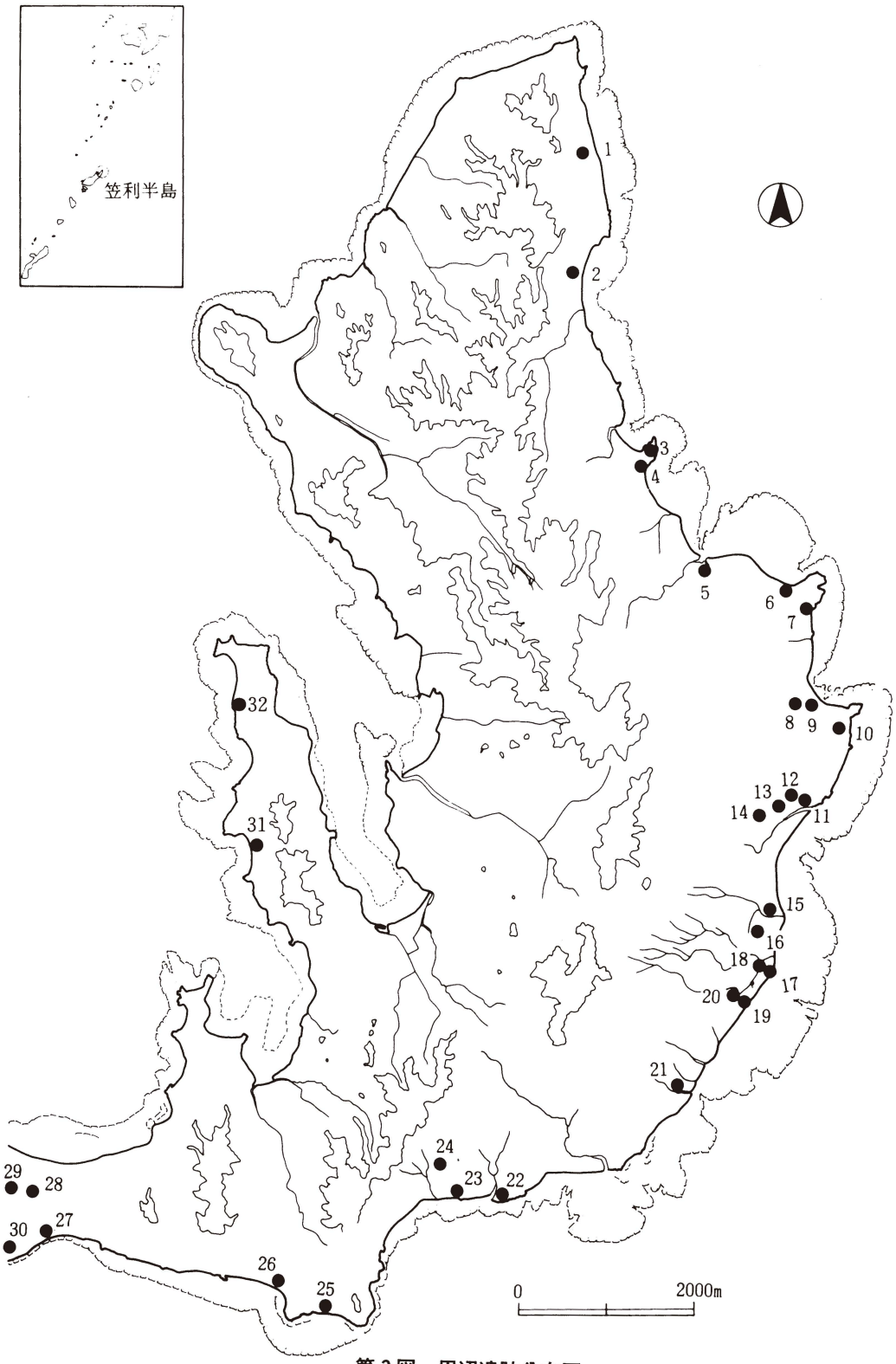
遺跡は海岸から約250m程の内陸部にあり，洪積世台地上の裾の部分に形成された新砂丘部にある。砂丘形成時において地形が複雑に湾入しており，遺跡は後方（西側）の砂丘に続いて出来たものと思われる。西側から南側に向けて小川が流れており，更に南側から東側に向っている。小川によって後方は寸断され，低湿地帯になりゆるやかに定山に続いて行く。遺跡の立地する新砂丘は砂丘形成時には旧砂丘（後方）と南側から延びて来る砂丘があった。新砂丘の前（東側）との間には北側から流れる小川で寸断されている。したがって古代人達が生活していた頃の地形と現在の地形は砂丘の移動または形成で変っていたと思われる。



第1図　奄美大島の地図



第2図　遺跡周辺地形図


笠利半島
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
2000m

第3図　周辺遺跡分布図

第2節　歴史的環境

奄美大島は九州の南部から台湾にかけて弧状に通なる南西諸島のほぼ中央に位置している。笠利半島はその東北端に長く突出し，行政区画では笠利町の全域と龍郷町の東半にあたる。

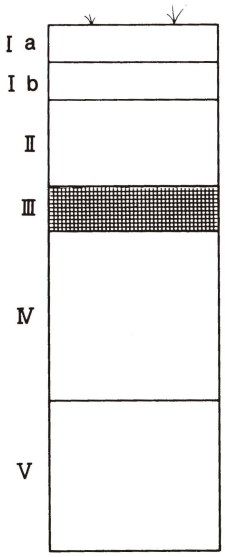
笠利半島には他地域に比べて考古学的な調査が比較的ゆきわたっており，多数の遺跡が知られている。(第3図)。半島西側のサウチ遺跡では磨製石鏃，貝札や弥生土器が出土している。万屋地区では下山田遺跡群，ケジⅠ，Ⅱ，Ⅲ遺跡，泉川遺跡，和野宇長浜遺跡群などの小規模遺跡が密集している。今回調査を行った下山田遺跡（東地区）は新砂丘上に形成された遺跡である。新砂丘上には用遺跡や宇宿港遺跡，崎原遺跡，マツノト遺跡などがあり，そのほとんどが兼久式土器の出土が目立っている。一方古砂丘では洪積台地の直下若しくはその縁辺部に形成されている。宇宿高又遺跡，下山田Ⅰ地点，喜子川遺跡などがある。爪形文土器，曽畑式土器などが出土している。今回の下山田Ⅲ遺跡は滑石，布目圧痕文土器などが出土した。(中山)

第1表　周辺遺跡地名表

番号	遺　跡　名	所　在　地	備　　考
1	用長浜遺跡	笠利町用長浜	
2	用遺跡	〃　用安良川	
3	辺留城遺跡	〃　辺留城	
4	辺留窪遺跡	〃　辺留窪	笠利町文化財報告№6
5	コビロ遺跡	〃　須野コビロ	〃
6	あやまる第2貝塚	〃　須野大道	〃　7
7	あやまる第1貝塚	〃　須野	
8	マツノト遺跡	〃　松ノト	
9	喜子川遺跡	〃　喜子川	
10	土盛遺跡	〃　土盛	
11	宇宿港遺跡	〃　宇宿港	笠利町文化財報告№4
12	宇宿貝塚	〃　宇宿大籠	笠利町文化財報告№3
13	宇宿高又遺跡	〃　宇宿高又	笠利町文化財報告№2
14	宇宿小学校遺跡	〃　宇宿	
15	万屋遺跡	〃　万屋	
16	万屋下山田遺跡	〃　万屋下山田	本報告書
17	万屋泉川遺跡	〃　万屋泉川	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(39)
18	ケジ遺跡	〃　万屋ケジ	〃　(38)
19	長浜金久遺跡第Ⅱ貝塚	〃　万屋長浜金久	〃　(42)
20	長浜金久遺跡第Ⅰ貝塚	〃　万屋長浜金久	〃
21	ナビロ川遺跡	〃　土浜	
22	立神遺跡	〃　土浜	
23	土浜遺跡	〃　土浜	
24	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡	〃　土浜イヤンヤ	1973年三島格・永井昌文調査
25	明神崎遺跡	〃　用安入瀬	
26	用安遺跡	〃　用安入瀬	
27	赤尾木遺跡	龍郷町赤尾木	
28	ウフタ遺跡	〃　赤尾木ウフタ	熊本大学考古学研究室活動報告12
29	赤尾木保育所遺跡	〃　赤尾木	
30	手広遺跡	〃　手広	手広遺跡発掘調査終了報告
31	鯨浜遺跡	笠利町喜瀬	
32	サウチ遺跡	〃　喜瀬サウチ	笠利町文化財報告№1

第3章　調 査 の 概 要

第1節　遺跡の層序



第4図　土層柱状模式図

遺物包含層は遺跡北側に残り，南側には残っていなかった。

層序は次のとおりである。

第Ⅰ層　表土。土色の違いからａ，ｂ層に分けた。

第Ⅱ層　褐色砂層。無遺物層であるが，部分的に第Ⅰ層の攪乱層が入っている。

第Ⅲ層　黒褐色砂層。遺物包含層である。土器片，類須恵器，滑石，鉄サイなどの遺物が一緒に検出されている。

第Ⅳ層　白砂層。多少粒子の粗い砂層である。たまに貝類などを含むが，はっきりした文化層をなしていない。

第Ⅴ層　白砂層。第Ⅳ層にくらべて砂の粒子が細かくサラサラと手のひらからこぼれる感じである。無遺物層。かなり深くまで掘ったが土色に変化なく遺物の検出もなかった。

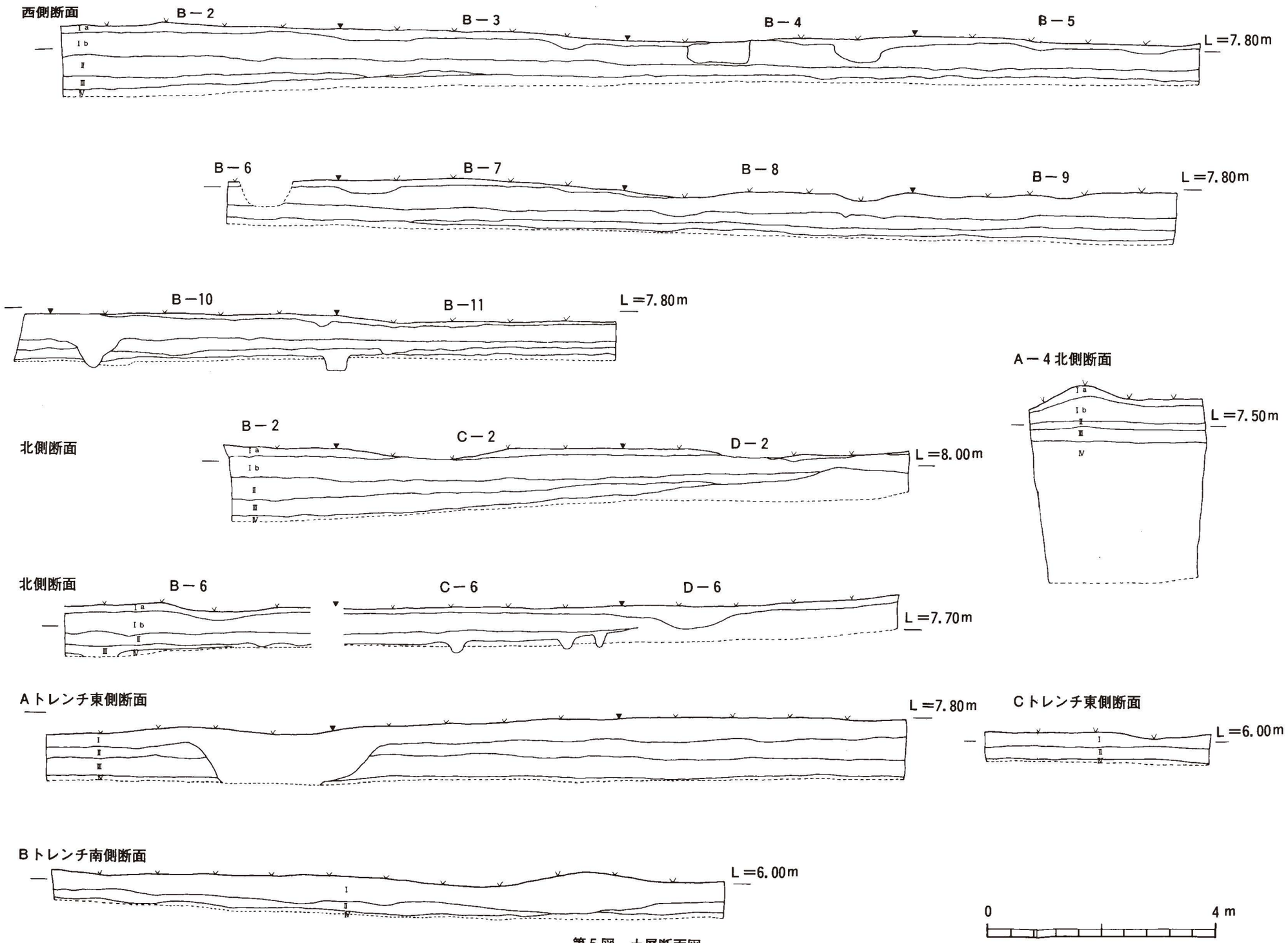
以上遺物包含層は第Ⅲ層だけであった。またＡ－４区においては２ｍ×２ｍのグリットを深掘りし下層確認を行った。この中にも遺物包含層はなかった。（中山）

第2節　縄文時代の遺物（第6図）

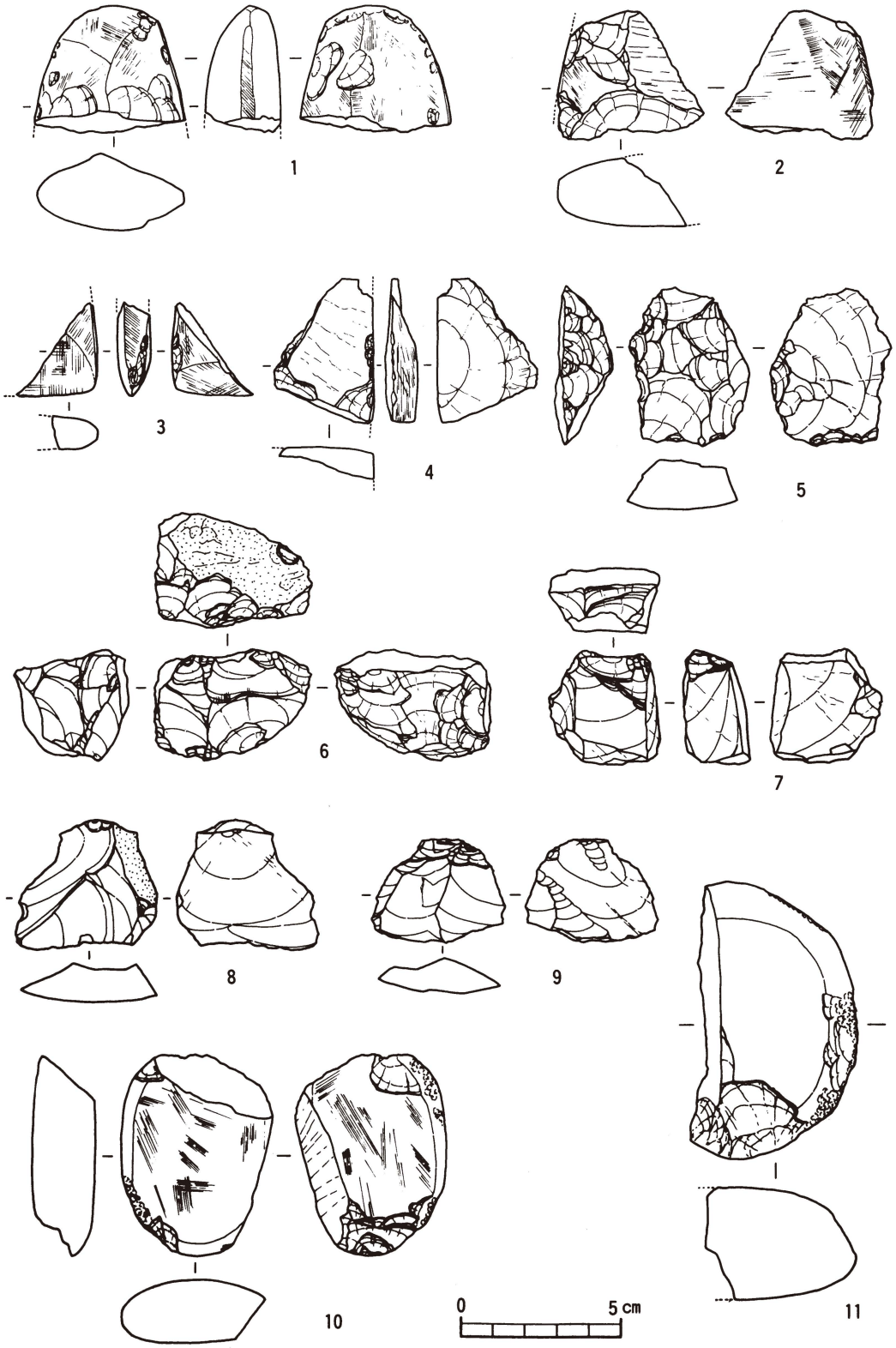
これらの石器等は，表層・Ⅱ層・Ⅲ層の各層から出土したものである。

１は表・裏両面が研磨されているもので，磨製石斧の基部と思われる。両側縁も面取りされており，研磨痕が顕著である。２及び３も磨製石斧片と思われるもので，特に３は刃部の部分であり，側面の面取りが明確である。３点とも輝緑岩製であり，同一個体の可能性もある。４は一部に研磨面を有するものである。残存する研磨面は平坦面であり研磨痕が観察される。粘板岩製である。５はチャートの剥片を利用したもので，側縁は急角度の剥離が施され，図の下縁には粗い剥離がみられる。スクレイパーと考えられる。６は一部に自然面を残し，打面を変えながら，回転するように，ほぼ全面に対して剥片を剥離している石核である。ホルンフェルスを使用している。７も同様に石核であり打面調整が顕著に行われている。チャート製である。８，９はホルンフェルスの剥片である。10は両面に擦痕が明瞭に残り，磨石として利用されたと思われる。11はいわゆる磨石と呼ばれるものであり，周縁には敲打痕が残る。半分破損している。10，11とも輝緑岩製である。

これらの遺物は，下山田Ⅱ遺跡（道路の反対側に位置し，昭和59年度県教委調査）のものが道路の建設等によって移動したもの，あるいは傾斜にそって自然に移動したものと思われる。石斧や石核の形状，また剥片等の素材もほとんど同様のものであった。


西側断面
B－2
B－3
B－4
B－5
L＝7.80m
B－6
B－7
B－8
B－9
L＝7.80m
B－10
B－11
L＝7.80m
A－4 北側断面
L＝7.50m
北側断面
B－2
C－2
D－2
L＝8.00m
北側断面
B－6
C－6
D－6
L＝7.70m
Aトレンチ東側断面
L＝7.80m
Cトレンチ東側断面
L＝6.00m
Bトレンチ南側断面
L＝6.00m
0
4 m

第5図　土層断面図



第6図　縄文時代の石器

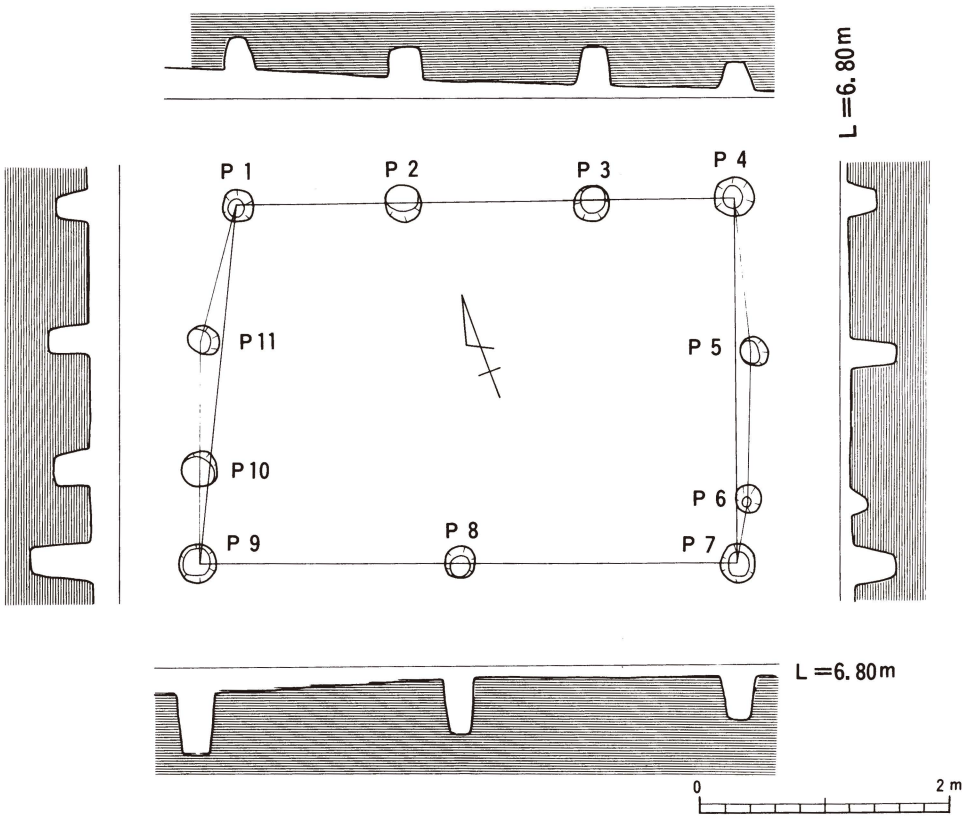
第３節　グスク時代の遺構と遺物

１．検出遺構

第Ⅳ層（白色砂層）上面で黒褐色砂がはいったピット等の遺構が検出された。遺構は掘立柱建物跡６軒，高床倉庫跡３軒の他炉跡や製鉄遺構と思われるものも検出された。

掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡



第７図　１号掘立柱建物跡

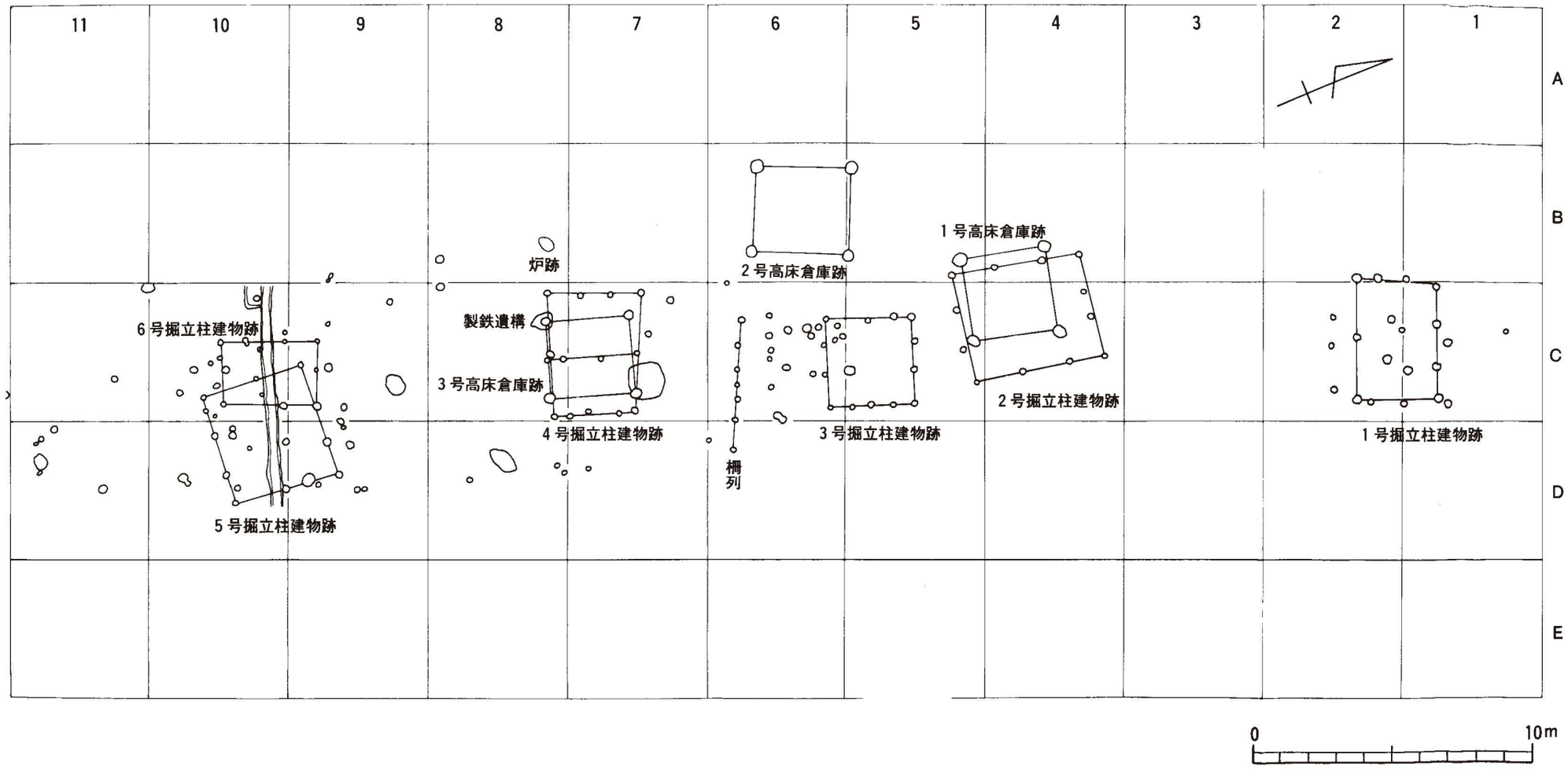
調査区の北側Ｃ－１・２区で検出された。主軸方向は略東西である。３間×３間の建物であるが，南側桁行柱間は２間となっている。また梁行柱列は東西両方とも外側に張り出している。

柱穴は直径が約22～28㎝であり，検出面からの深さは最も深いもので約50㎝を測る。

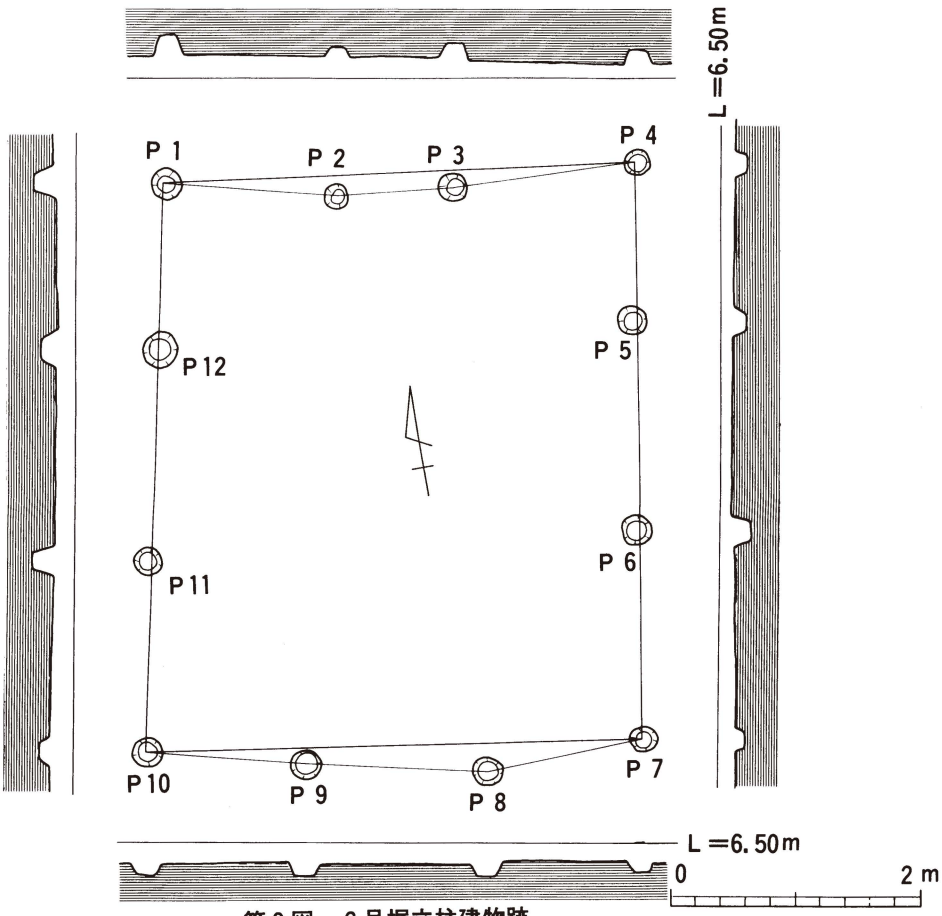
また，この建物の柱穴のそばにも柱穴が検出されているが，建て換えよりは重複する別の建物の方が可能性が強い。柱穴の一部に貝が認められた。

第２表　１号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間
東西 N－69°－W	P1－P4 4.00	P1－P9 2.91	P1－P2 1.34	P1－P11 1.13
	P9－P7 4.32	P4－P7 2.94	P2－P3 1.52	P11－P10 1.04
			P3－P4 1.14	P10－P9 0.75
			P9－P8 2.10	P4－P5 1.25
			P8－P7 2.22	P5－P6 1.20
				P6－P7 0.50


11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
炉跡
製鉄遺構
6号掘立柱建物跡
3号高床倉庫跡
4号掘立柱建物跡
5号掘立柱建物跡
2号高床倉庫跡
1号高床倉庫跡
3号掘立柱建物跡
2号掘立柱建物跡
1号掘立柱建物跡
柵列
0
10m

第8図　遺構分布図



第９図　２号掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡

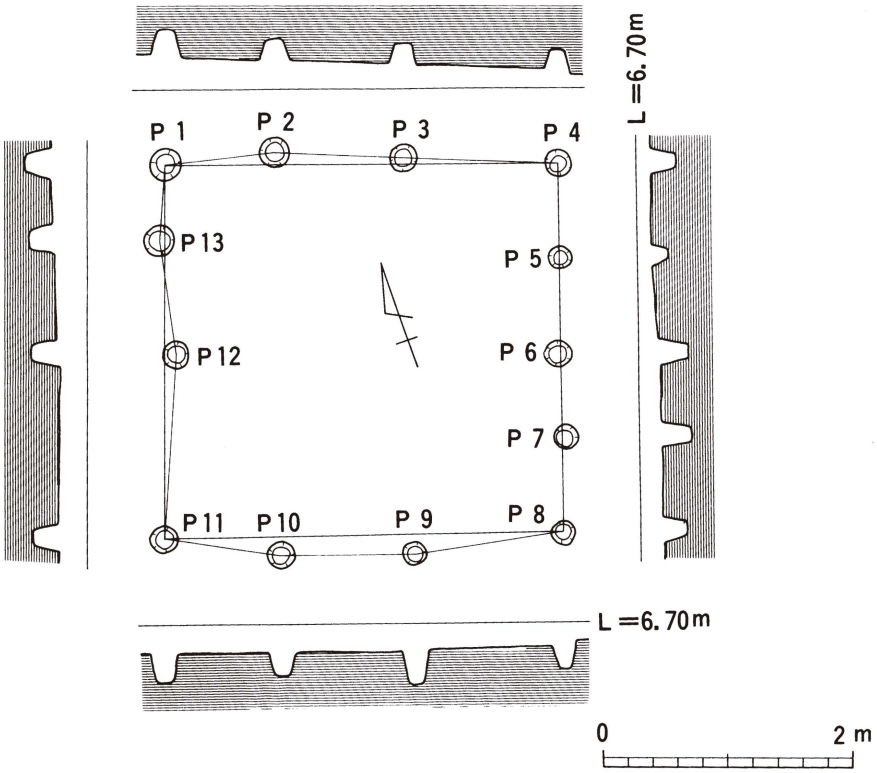
Ｂ・Ｃ－４・５区で検出され，１号高床倉庫跡と切り合い関係にある。主軸方向は略南北である。３間×３間の建物であるが，桁行柱間はＰ１－Ｐ10が4.58m，Ｐ４－Ｐ７が４．66mで平均4.62mを測り，梁行柱間はＰ１－Ｐ４が３．82m，Ｐ10－Ｐ７が4.02mで平均3.92mとなる長方形を呈する。

梁行柱列は北側が内側に入り込み，南側のものは外側に張り出している。

第３表　２号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間
南北 N－10°－E	P1－P10 4.58	P1－P4 3.82	P1－P12 1.32	P1－P2 1.38
	P4－P7 4.66	P10－P7 4.02	P12－P11 1.70	P2－P3 0.96
			P11－P10 1.54	P3－P4 1.50
			P4－P5 1.28	P10－P9 1.28
			P5－P6 1.68	P9－P8 1.48
			P6－P7 1.68	P8－P7 1.28

柱穴の大きさは平均約20cmであり，検出面からの深さは約10～20cmを測る。この建物のピットが総じて浅いのは，検出面が白色砂層上面ではなく，それより若干下がった面で検出されたことによるためである。



第10図　3号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡

C－5・6区で検出された。東西方向に主軸をもち，桁行柱間は3間，梁行柱間は西側が3間，東側が4間となっている。柱間は桁行が広く，梁行が短い柱間となる。西側梁行のP11とP12の間にはピットが検出されなかったが，入口等に関係あるのか判断できない。南北の桁行柱列は，それぞれ外側に張り出している。

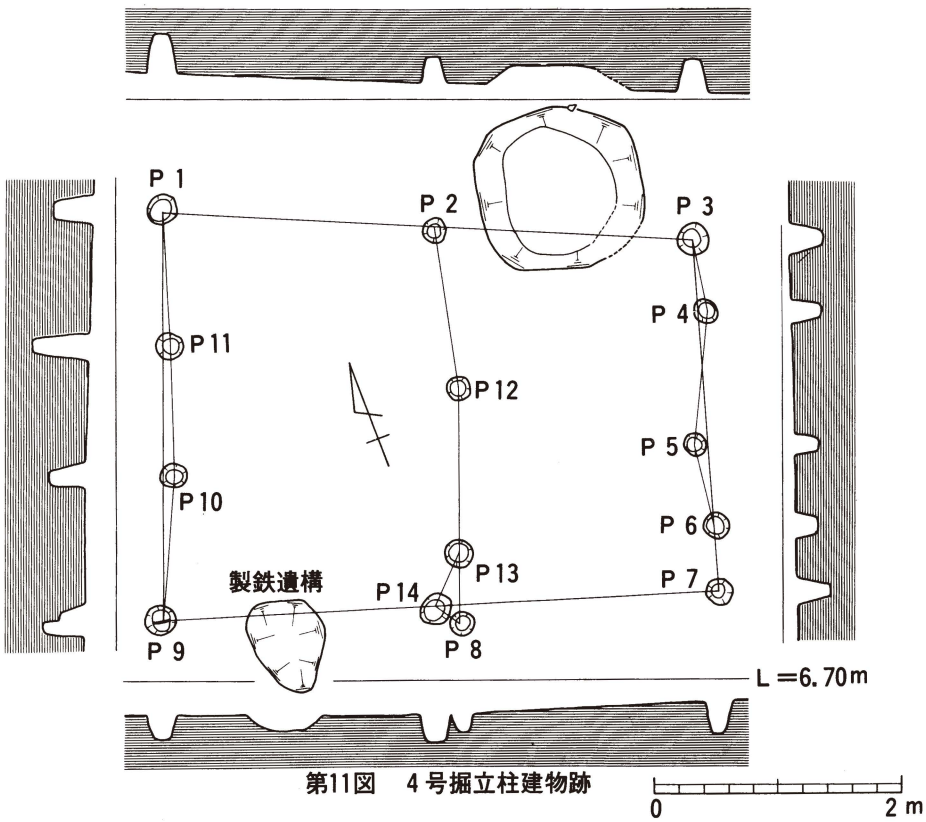
第4表　3号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間
東西 N-71°-W	P1－P4 3.16	P1－P11 3.02	P1－P2 0.79	P1－P13 0.62
	P11－P8 3.21	P4－P8 2.99	P2－P3 1.04	P13－P12 0.93
			P3－P4 1.24	P12－P11 1.48
			P11－P10 0.95	P4－P5 0.75
			P10－P9 1.08	P5－P6 0.79
			P9－P8 1.20	P6－P7 0.66
				P7－P8 0.79

桁行柱間はP1－P4が3.16m，P11－P8が3.21mで平均3.18mを測り，梁行柱間がP1－P11が3.02m，P4－P8が2.99mで平均3.00mとなり正方形に近いものとなっている。

柱穴の大きさは，ほとんど直径は約20cmと同様であり，検出面からの深さも約20～28cmと近い数字になっている。

また第8図で見るように，P10とP11の内側に数個のピットが検出されているが，入口等の設備等に関係あるのか明確でない。



第11図　4号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡

C－7・8区で検出された。3号高床倉庫跡及び製鉄遺構と切り合い関係にある。桁行柱間は2間であり，梁行柱間は西側が3間，東側が4間となっている。またその間にも柱列がみられる。

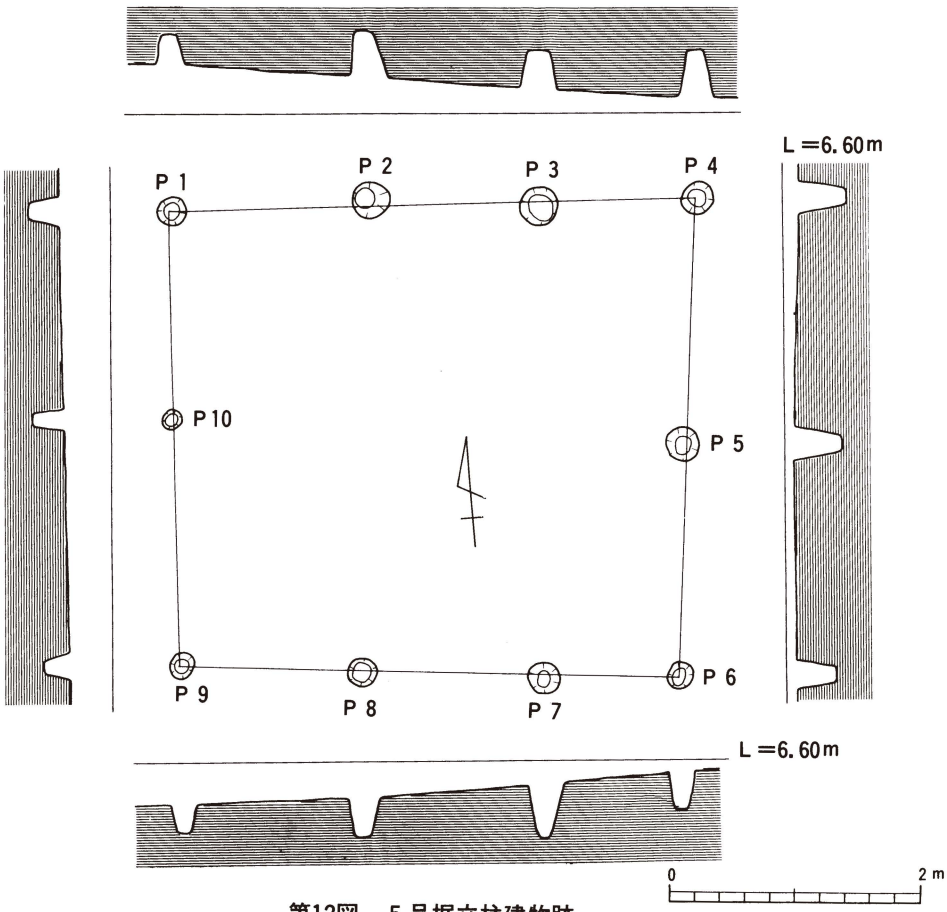
この4号掘立柱建物跡は，他の建物跡と異なり桁行柱間は広く，梁行柱列も東側と西側では対応していないが，一棟の建物として判断した。

第5表　4号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間	
東西 N-69°-W	P1－P3 4.25	P1－P9 3.31	P1－P2 2.18	P1－P11 1.09	P13－P8 0.56
	P9－P7 4.46	P2－P8 3.23	P2－P3 2.07	P11－P10 1.05	P3－P4 0.58
		P3－P7 2.86	P9－P14 2.18	P10－P9 1.18	P4－P5 1.09
			P9－P8 2.40	P2－P12 1.33	P5－P6 0.67
			P14－P8 0.25	P12－P13 1.34	P6－P7 0.54
			P8－P7 2.07	P13－P14 0.47	

建物の北東部には径約120cmの掘り込みがみられるが，この建物と関係するかどうか，定かでないが，施設の一部である可能性も考えられ，図面上に入れてある。

柱穴の直径は約20cm前後であり，検出面からの深さは西側柱列が約30～40cmと深く，他は約20～30cmとなっている。



第12図　5号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡

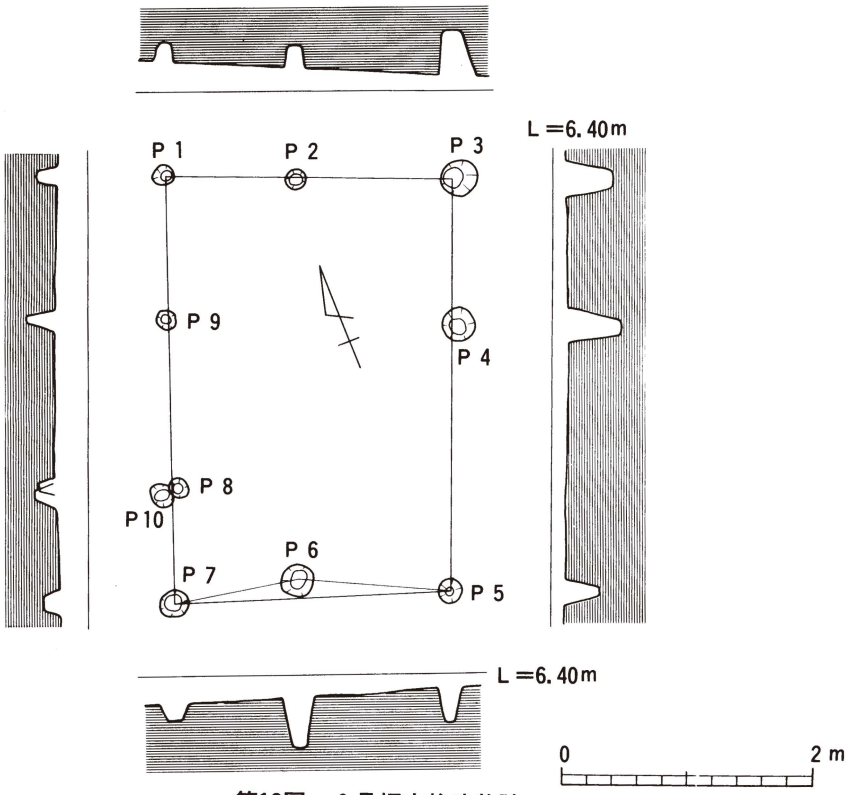
C・D－9・10区で検出された。6号掘立柱建物跡と切り合い関係にある。主軸方向は略東西方向である。2間×3間の建物で，桁行柱間はP1－P4が4.23m，P9－P6が4.02mで平均4.12m，梁行柱間はP1－P9が3.67m，P4－P6が3.86mで平均3.76mを測る。

柱穴の直径は約20～25cmであり，検出面からの深さは約24～40cmである。

この建物の周囲にもピットが多く検出されており，建てかえ等が予想されるがそれらを把握するのは困難であった。

第6表　5号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間
東西 N－86°－W	P1－P4 4.23	P1－P9 3.67	P1－P2 1.60	P1－P10 1.69
	P9－P6 4.02	P4－P6 3.86	P2－P3 1.49	P10－P9 1.98
			P3－P4 1.24	P4－P5 2.00
			P9－P8 1.47	P5－P6 1.86
			P8－P7 1.46	
			P7－P6 1.09	



第13図　6号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡

C－9・10区で検出され，5号掘立柱建物跡と切り合い関係にある。主軸方向は略南北である。

2間×3間の建物であるが，桁行柱列のP4とP5の間にピットは検出されなかった。またP8に接してP10が認められるが，柱の建てかえもしくは支え柱の可能性も考えられるが定かでない。

P3は5号掘立柱建物跡のP2と重複しているが，調査時点でピット内の切り合いを確認してはいない。桁行柱間と梁行柱間を計測し，それぞれの距離を求めた結果P3と5号掘立柱建物跡のP2が重複していると想定したものである。

第7表　6号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間
南北 N-22°-E	P1－P7 3.44	P1－P3 2.29	P1－P9 1.16	P1－P2 1.04
	P3－P5 3.30	P7－P5 2.23	P9－P8 1.34	P2－P3 1.25
			P8－P7 0.93	P7－P6 1.01
			P10－P7 0.87	P6－P5 1.23
			P6－P4 1.27	
			P4－P5 2.13	

桁行柱間はP1－P7が3.44m，P3－P5が3.30mで平均3.37mとなり，梁行柱間はP1－P3が2.29m，P7－P5が2.23mで平均2.26mとなる。

柱穴はP3・P4・P6の直径が約25cm，検出面からの深さが約35～40cmであり，他の柱穴は直径が約15～20cm，深さも約14～20cmとなっている。

高床倉庫跡

掘立柱建物跡のなかで１間×１間の建物跡群があり，これは他の掘立柱建物跡とは，柱穴の規模が直径や深さ等で大きく異なり，通常の建物跡とは考えにくく，高床式の可能性が強いと考えられ高床倉庫跡として取り扱った。

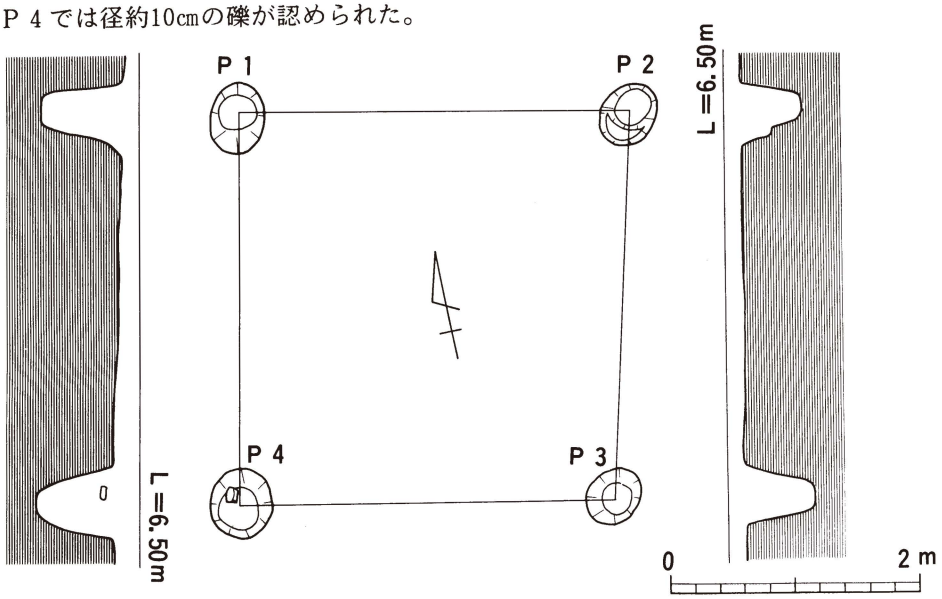
１号高床倉庫跡

Ｂ・Ｃ－４・５区で検出された。２号掘立柱建物跡と切り合い関係にある。東西の柱間平均は3.17m，南北は3.10mと，東西柱間がわずかに長い方形となっている。柱穴は掘立柱建物跡と比較するとかなり大きく，それぞれの直径はＰ１（58×44cm），Ｐ２（54×44cm），Ｐ３（50×40）cm，Ｐ４（56×50cm）であり，また検出面からの深さは約50～68cmを測る。

なおＰ４では径約10cmの礫が認められた。

第８表　１号高床倉庫跡計測表

東　西	南　北
P1－P2 3.20	P1－P4 3.15
P4－P3 3.15	P2－P3 3.05



第14図　１号高床倉庫跡

２号高床倉庫跡

Ｂ－６区で検出された。東西の柱間は3.20m，南北の柱間は平均3.41mとなり，南北の方が約20m長い方形を呈している。

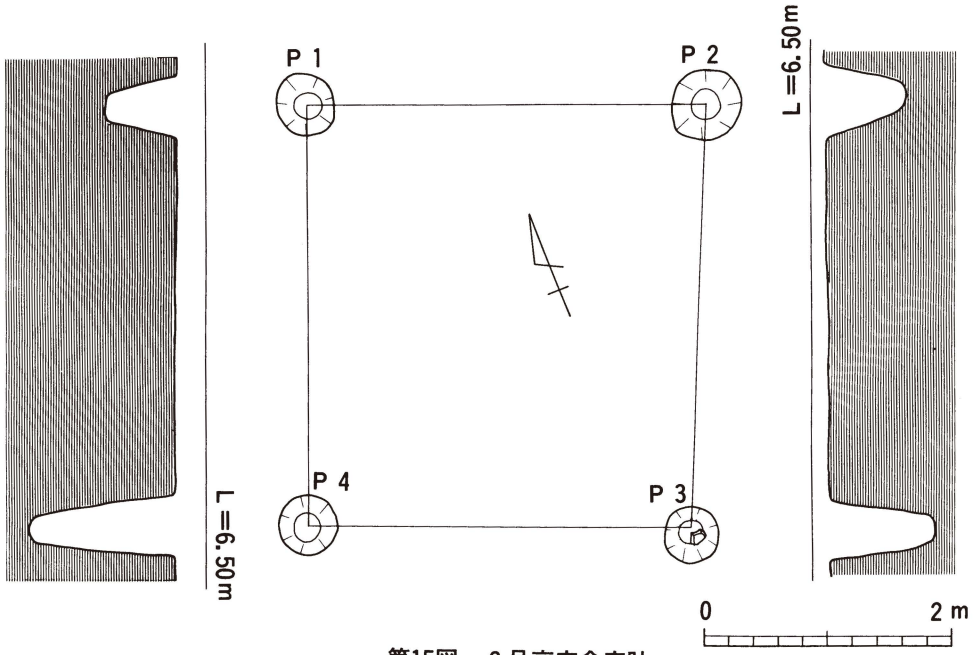
柱穴は大きさがそれぞれＰ１（50×44cm），Ｐ２（54×54cm），Ｐ３（46×44cm），Ｐ４（48×48cm）であり，検出面からの深さはＰ１－48cm，Ｐ２－64cm，Ｐ３－84cm，Ｐ４－約120cmと一定していない。なおＰ３では小礫（径約10cm）が認められた。

第９表　２号高床倉庫跡計測表

東　西	南　北
P1－P2 3.20	P1－P4 3.38
P4－P3 3.20	P2－P3 3.45

３号高床倉庫跡

Ｃ－７・８区で検出された。４号掘立柱建物跡と切り合い関係にある。柱間は東西の平均が



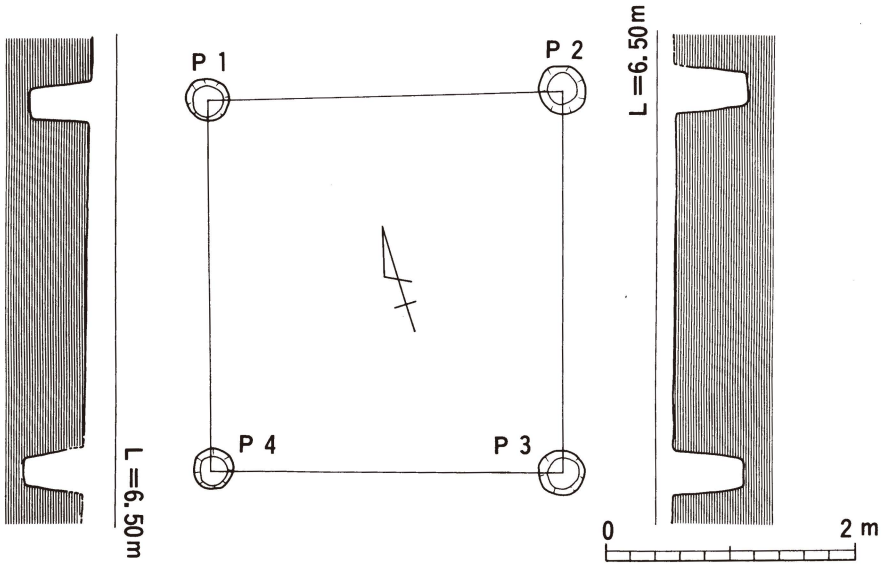
第15図　2号高床倉庫跡

2.84㎝，南北が3.01mとなり南北方向が若干長い方形を呈する。柱穴の大きさは長径約35～38㎝，検出面からの深さは約48～58㎝を測り，他の高床倉庫跡より柱間，柱穴が小さい。

Ｐ４の柱穴の直上（検出面）には，ピットの凹みを利用したと考えられる製鉄遺構が確認されている。

第10表　3号高床倉庫跡計測表

東　西	南　北
P1－P2 2.85	P1－P4 2.95
P4－P3 2.83	P2－P3 3.08



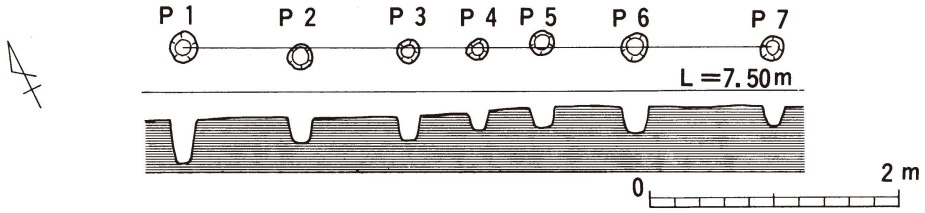
第16図　3号高床倉庫跡

柵列状柱穴群

C・D－6区で計7個のピットが東西方向に一列に並ぶ一群が認められた。ちょうど3号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡の中間に位置している。

ピットの直径は約20cm前後と一定しているが，検出面からの深さはそれぞれ異なり，約15cm～35cmまでの深さを測る。各ピット間の広さは次のとおりである。P1P2－0.94m，P2P3－0.86m，P3P4－0.55m，P4P5－0.50m，P5P6－0.74m，P6P7－1.10m。

あるいは掘立柱建物跡柱列の一部とも考えられるが，対応する柱列は検出されなかった。



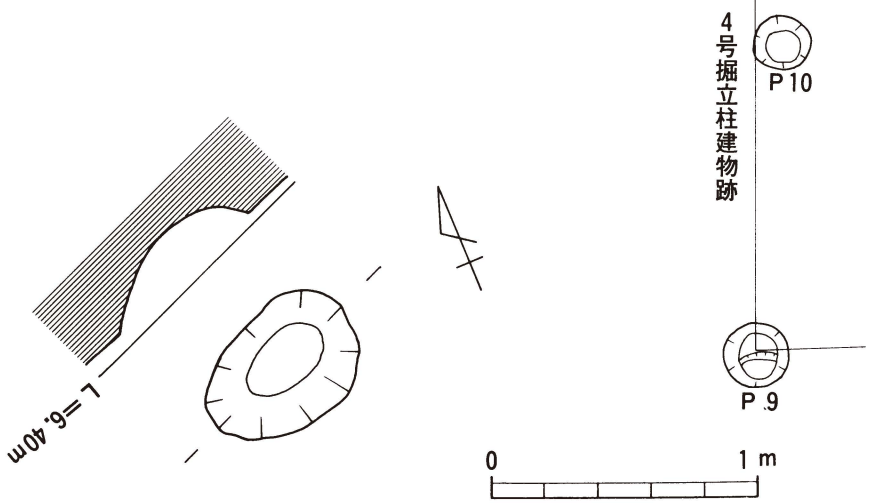
第17図　柵列状柱穴群

炉　跡

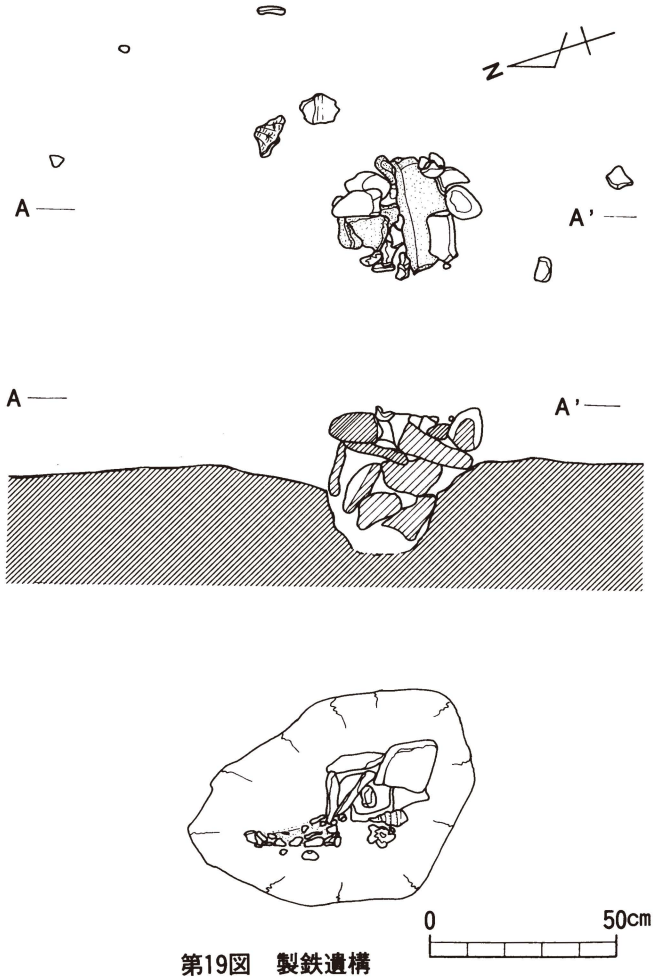
B－8区で検出された。4号掘立柱建物跡の近くで南側桁行柱列の西側延長線上に位置している。P9の西側約1.4mの距離にあり，卵形の楕円形を呈している。長径と短径はそれぞれ64cm×44cmであり，検出面からの最深部は約20cmを測る。

炉内部は黒色砂層であり，その中に炭化物粒子が多量に混在して認められた。また焼けた貝等の小破片も混在していた。

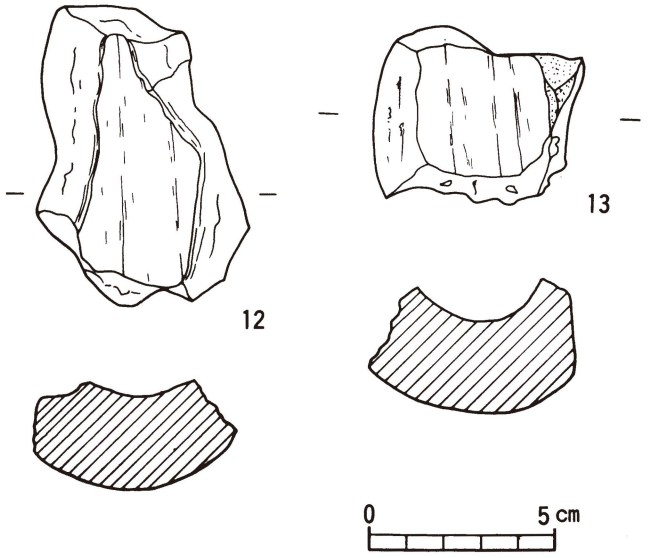
炉の周辺には建物跡と思われるピット等は検出されず，そのため屋外炉と判断される。　またC－10区，6号掘立柱建物跡の西側にも炭化物等が混在する落ち込みが認められたが，近世の溝に切られており，明確にすることはできなかった。（宮田）



第18図　炉跡



第19図　製鉄遺構



第20図　製鉄遺構内出土遺物

製鉄遺構

本遺跡から製鉄遺構と思われるものはC－9区から一ケ所確認されている。集石が約50cmの広がりであり，そのほとんどが焼けている。炉壁と思われる部分に板状の砂岩（ビーチロック）状の石が使用されている。床面は砂が板状に焼けて固く締まっている。まるでサンゴ礫を敷いたようである。約50cmの掘り込みにはフイゴの羽口などが投げ込まれた状態で出土している。

近くには鉄サイなどが出土しており，製鉄を行った遺構として有力である。大島本島ではフイゴの羽口は笠利町サウチ遺跡で発見されている。ただしサウチ遺跡は弥生時代である。12～13世紀の資料としては「製鉄跡」としては初めての発見になる。

遺　　物

遺構から出土した人工遺物は無文土器片５点とフイゴの羽口である。フイゴ口は全部で11点出土しているが，そのほとんどが同一物である。一個体と考えられる。第20図，表面は赤褐色で器厚が2.4cmと厚みを持っている。内側は黄褐色である。

土器片は無文の土器片５点だけで土器名などは不明である。色調は赤褐色で焼成も良い。土器片が小片のため器形も不明である。（中山）

2．出土遺物

1．土器　（第21図）

本遺跡からは144点の土器が出土した。これは第３層の文化層から出土した土器だけである。土器は数タイプに分類出来る。そのほとんどが無文土器である。

1．無文土器（兼久式土器）
2．布目圧痕文土器
3．外耳土器
4．貼り付け凸帯文土器
5．その他の土器

以上の５つに分けることが出来る。17の布目圧痕文土器は表面は赤褐色で研磨されている。裏面に布目の圧痕がある。口縁部でほぼ直口である。胎土は粗い粒子が入っており，焼成は良好である。

無文土器のほとんどが兼久式土器と思われるが小片のため全部が兼久式土器とは言えない。14は口縁部から胴部にかけての土器片である。口縁部がやや外反し，胴部のやや張る土器，兼久式土器３類にあたる。[注1]

外耳土器は２点の出土だけである。２点は焼成，胎土，色調などから同一個体と思われるが接合出来なかった。色調は赤褐色，胎土は石英粒子を含みザラザラした砂質土器である。焼成はやや良い。外耳は「こ」の字状の上部で上に湾曲し外耳の中央部が高い。兼久式土器と一緒に検出される土器である。[注2]

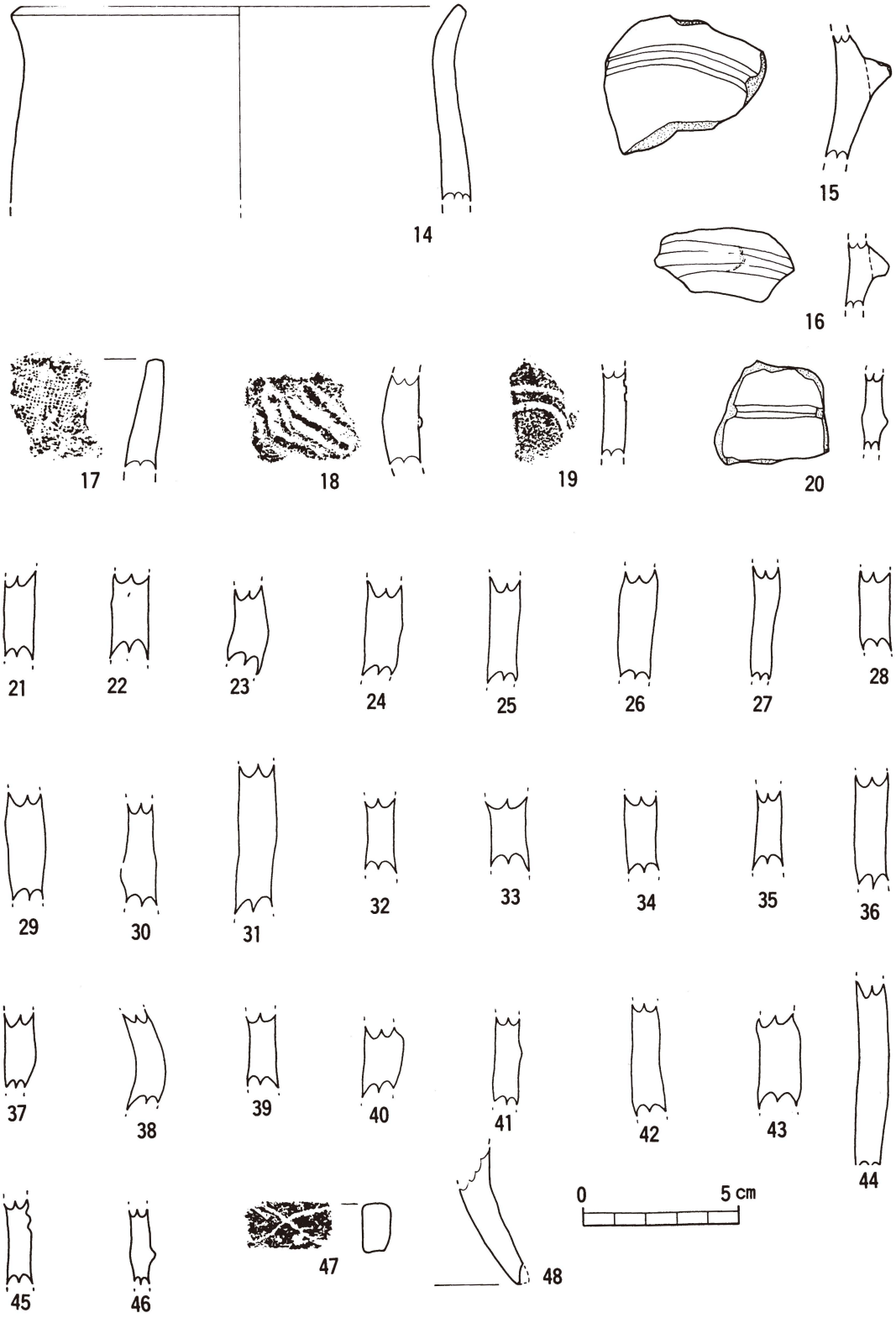
貼り付け凸帯文土器は２点だけの出土である。ミミズ貼れ凸帯で湾曲した文様帯であるが，小片のため全体の文様構成が不明である。赤褐色で石英粒を多く含み焼成は良好である。やや厚手の土器である。

48は脚の部分である。底部の確認される遺物はこの２点だけで，他は底部の近くや胴部と思われる小片が多い。兼久式土器の特徴である葉痕の圧痕を有する底部の検出は見られなかった。

その他約1.5cmの長方形状の焼き物があり，47は上部にＸ線状の沈線文が入っている方形状になって両端が欠損している。19は２条の沈線で重弧文のように思えるが小片のため不明である。その他表採資料からは下山田Ⅱ遺跡（本遺跡の道路を挟んだ向かい側）から多く出土した縄文時代の土器が入っている。

本遺跡出土の土器は以上である。１部Ｃ－１区最下層（白砂層）から有文土器片が出土している。全体的には兼久式土器がほとんどであり，布目圧痕文土器，貼り付け凸帯文土器，外耳土器などが出土しているが時期的にはほとんど一緒である。大形の土器片はほとんどなく，小さな土器片が目立った。全体的に遺物の出土量も少なく復元出来る資料の検出もなかった。となりの第Ⅱ地点で縄文時代の遺物が多量に出土したのに比べて対照的である。（中山）

注１　中山清美「兼久式土器（Ⅲ）」「南島考古」第９号1984年
注２　竜郷町教育委員会「手広遺跡」1984年



第21図　出土遺物実測図（土器）

2．類須恵器（第22図）

出土した類須恵器は，いずれも小破片であり全体の器形が把握できるものはなかった。

49は短かく外反する口縁部片で，端部はまるく納める。器壁はうすく内外面ともナデ調整がみられる。壺の口縁部と思われる。50も壺の口縁部と思われるものであり，大きく開く口縁部の口唇直下には断面三角形の段が設けられる。内外面ともヘラ状の工具で調整されている。51～59は壺の破片と思われるもので，外面は格子目状の叩きが主で，中には平行条線状の叩き（52）もみられる。内面は花形の叩き目が残るもの（54・57）もあるがその後最終的にヘラ状の工具によって調整されている。60は壺の肩部と思われるもので，外面には格子目状の叩き目がみられ，内面は叩き目を消すようにヘラ状の工具によって調整されている。器壁はかなり薄いものである。61は壺の胴部片，62は底部である。外面は格子目状叩き，内面はヘラ状工具による調整がみられる。62の底部直径は11㎝を測る。63・64は底部底面片である。外面はナデに近い調整がみられる。

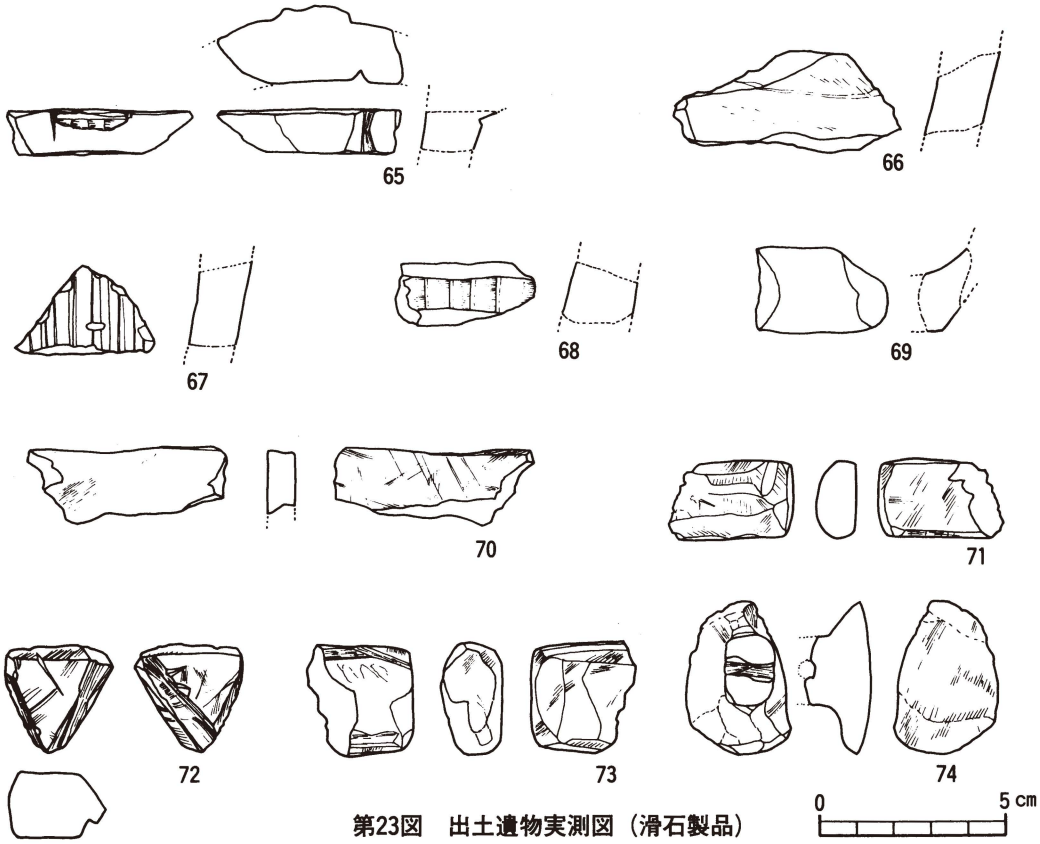
3．滑石製品（第23図）

65～69は滑石製石鍋片である。65は縦形の耳が付くもので，口縁部に近い部位と考えられる。耳は約２㎝の幅で，加工時の切り込みは器面まで及んでいる。また内面は丁寧に仕上げられ，Ｖ字状の切り込みが縦方向にみられる。外面にはススが付着している。67・68の外面にはノミ痕が認められる。70～73は滑石製石鍋の破片を再加工したものと思われる。70・71には加工痕が認められ，72は擦り切りの痕跡が観察される。73も棒状に加工したと思われるものである。74は楕円形状を呈した中央部に鈕状の把手が作り出され，その部位に穿孔されたものでありバレン状の形態をもつものである。穿孔から破損している，片側平坦面は若干まるみを持ち，表裏面とも丁寧に研磨を施している。同様のものは沖縄県大里エーヤマ遺跡，伊良波東遺跡で出土している。（宮田）

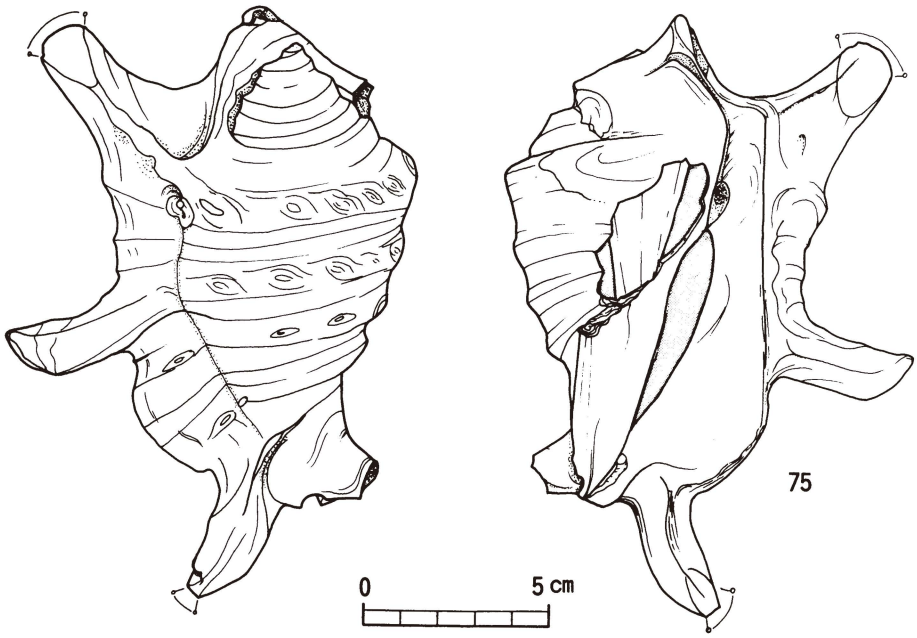
4．貝 製 品（第24図）

本遺跡からの貝製品の出土はわずか２点である。１点はスイジガイの原形をとどめているが，もう１点はスイジガイの管状棘の部分を加工したものと思われる。スイジガイは管状棘が６本で刺は上下刺を中心として右方のみに偏在するが，本種は四方に突出して恰も水字をなし，太くて短い。75は加工されている管状棘は上刺左方と下刺の左方の２本が加工されている。上刺左方の方は上下から磨かれており「ノミ」状にするどく刃を磨いている。下刺左方は下からの加工が強くなされており，上からの加工はわずかである。ただし刃部が欠損しているため明確にはわからない。まだスイジガイの上刺左方の部分と思われるものもある。先端部分が75と同様に上下から加工されている。ただし75のように刃部は鋭くなく，先端を鋭らした感じである。先端部分は欠損しているため不明。図化していない。（中山）

第22図　出土遺物実測図（類須恵器）



第23図　出土遺物実測図（滑石製品）



第24図　出土遺物実測図（貝製品）

第4章　ま　と　め

調査の結果，本遺跡は道路を隔てた下山田Ⅱ遺跡とは異なり，比較的新しい時期のものであった。下山田Ⅱ遺跡は縄文時代の遺跡であったが，その海側（東側）に所在する本遺跡は，新砂丘上に形成されたものであることが明らかとなった。

今回の調査で6棟の掘立柱建物跡と3棟の高床倉庫跡，それに炉跡及び製鉄跡が検出された。掘立柱建物跡と思われるピットは，手広遺跡でも検出されており，ピット中に貝や石を入れて柱を補強する方法も本遺跡と同様であり，時期的にも近い関係にある。ただし手広遺跡では，調査面積が小規模であったため建物としての全容は把握されていない。掘立柱建物跡の各々の規模及び全体が明確にできたのは大島本島では初めてのことである。

6棟の掘立柱建物跡はそれぞれ住居用と考えられるが，6号は他と比較して床面積等の規模が小さく，倉庫あるいは物置小屋的な可能性も考えられる。また4号については形態的に他と異なり，中央にも梁行柱列がみられ，さらに土拡状の掘り込みとの関連も含め他の目的・用途が想定されるかもしれない。

この中で注目されるものは四本柱の建物跡であり，その柱穴の深さや直径等の規模から，通常の建物跡とは考えにくく高床倉庫跡としたものである。1間×1間の四本柱の建物については，福岡県有田遺跡群や神奈川県向原遺跡で奈良・平安時代の掘立柱建物跡として検出されている。また室町時代のものとしては，広島県草戸千軒町遺跡や山口県下右田遺跡で知られている。このなかで向原遺跡のものは高床倉庫と想定されている。

このように1間×1間の掘立柱建物跡は奈良，平安時代から室町時代に至る長い期間存在していることが理解されるが，奄美において重要なことは現在もなお高倉と呼ばれる四本柱の建物（倉庫）が存在することである。すなわち本遺跡で検出された1間×1間の掘立柱建物跡は，高倉の祖源の可能性を持つ点で重要と考える。しかし高床倉庫の中に何を入れたのかは今の時点では速断はさけたい。

調査の結果，2号掘立柱建物跡と1号高床倉庫跡が，4号掘立柱建物跡と3号高床倉庫跡及び製鉄遺構が，5号掘立柱建物跡と6号掘立柱建物跡がそれぞれ重複して検出されている。つまり全ての建物は同時に存在していないことになり，若干の時間差が考えられる。しかしそれらの先後関係は明確ではない。

ただし製鉄遺構は3号高床倉庫のピットの真上に作られている。すなわちピットの凹んだ部分がそのまま利用されていると考えられる。しかしそこにどれほどの時間差が存在するかは定かでない。加えて製鉄遺構と4号掘立柱建物跡との先後関係は不明であった。

また建物跡の重複は，1場所に2軒のみという少ないものであり，かなり短い時期のみ集落が営まれたことになろうか。

集落の規模は，まだ周囲に広がる可能性が大であるが，砂取り及び道路建設等の開発によって不明に近いものとなっており惜しまれる。

出土遺物には兼久式土器，類須恵器，滑石製石鍋などがあった。

本遺跡で出土した類須恵器の特徴は次のようなものであった。器種はほとんど壺と思われるものであったが，壺特有のヘラ描波状沈線文はみられなかった。小型の壺と思われ，器壁も薄いものが多かった。外面は格子目状の叩きのあとナデ調整，内面はヘラ状工具による調整が施されていた。

また鉢，大甕，玉縁口縁を持つ碗等の器種はみられなかった。

類須恵器については，近年カムィヤキ古窯跡郡の発見によって，ようやく窯場と器種構成が解明された。また年代についても，11世紀～13世紀の生産という年代が得られたことは重要な成果であった。しかし同地の他にも窯跡の存在する可能性はまだ残されており，また消費地との関係（流通も含め）ほとんど解明されていないのが現状である。

滑石製石鍋は長崎県西彼杵半島で製産され，西日本一帯で出土し，製品として各地に流通したものである。使用の年代は，上限は９世紀後半，下限は室町時代まで及ぶことが判明している。本遺跡で出土したものは，口縁部下位に縦形の耳が付くものであり，これと同タイプのものは南島では沖縄県大泊浜貝塚や同県熱田貝塚で出土している。

これらの遺物により，本遺跡は12～13世紀のものと思われる。

しかし，この時期でありながら青磁や白磁などは全く検出されなかった。南島に於いてこの時期はグスク時代と呼ばれ，グスクの調査では多量の輸入陶磁器が出土しているのに対し，集落遺跡としての下山田Ⅲ遺跡では全くみられず，これが本遺跡の特徴の一つでもある。

下山田Ⅲ遺跡は砂丘上に営まれた集落跡であった。今後このような類例が多く発見されれば奄美における12～13世紀のグスク以外の集落形態が明らかにされよう。（宮田・中山）

参考文献

豊見城村教育委員会「伊良波東遺跡」豊見城村文化財調査報告書第２集　1987年
伊仙町教育委員会「カムィヤキ古窯跡群Ⅰ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）　1985年
伊仙町教育委員会「カムィヤキ古窯跡群Ⅱ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）　1985年
沖縄県教育委員会「下田原貝塚・大泊浜貝塚」沖縄県文化財調査報告書第74集　1986年
竜郷町教育委員会「手広遺跡」　1984年
神奈川県教育委員会「向原遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告Ⅰ　1983年
福岡市教育委員会「有田遺跡群－第81次調査－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集　1986年
山口県教育委員会編「下右田遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告書第43集・46集　1978年・1979年
大瀬戸町教育委員会「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」　1980年
下川達弥「滑石製石鍋出土土地名表」九州文化史研究紀要第29号　1984年
池田栄史「類須恵器出土地名表」琉球大学法文学部紀要第30号　1987年
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「草戸千軒町遺跡」　1983年
福岡市教育委員会「吉武遺跡群Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集　1986年
鹿児島県教育委員会「山崎Ｂ遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（18）　1982年

図　　版

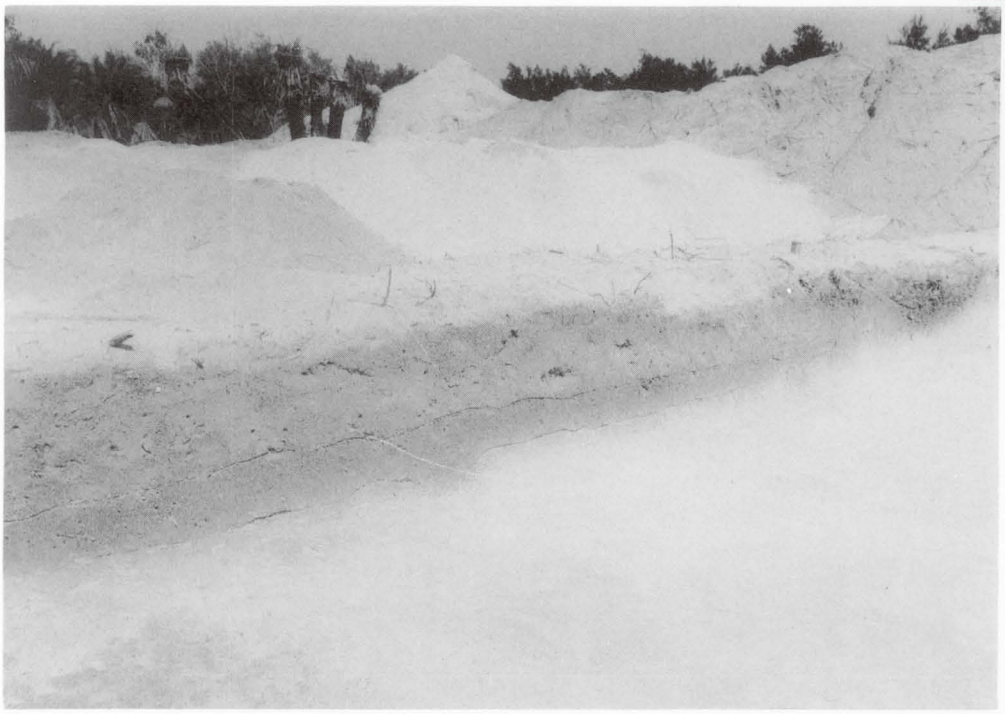
遺跡近景（北側から）

道路反対側から

図版 2

土層断面

土層断面（手前は１号高床倉庫のピット）

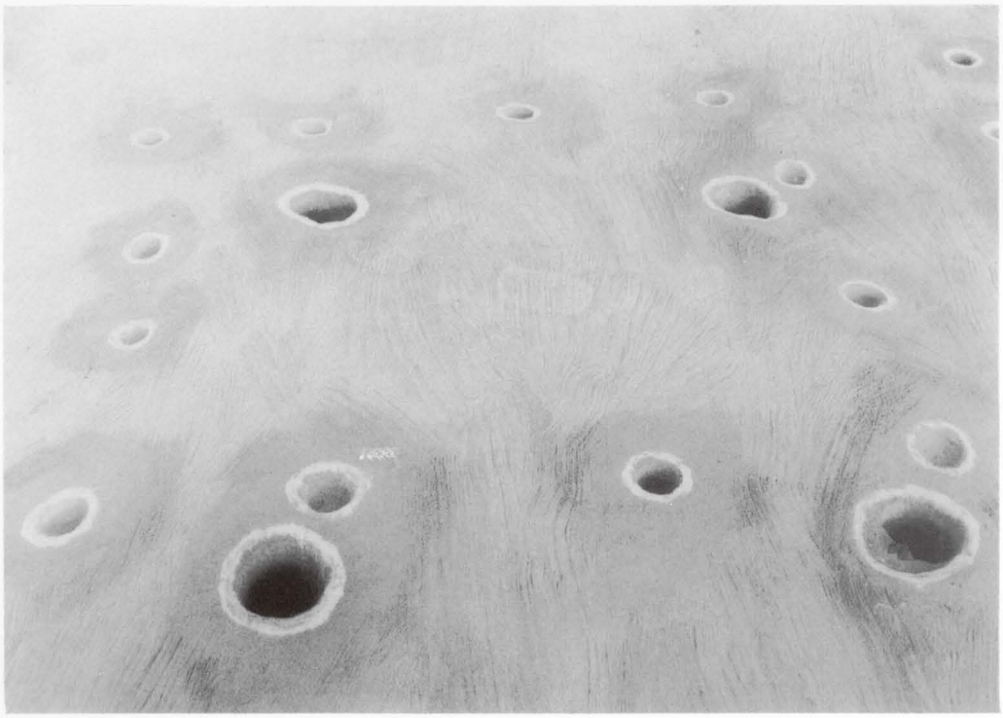


東面方向土層断面

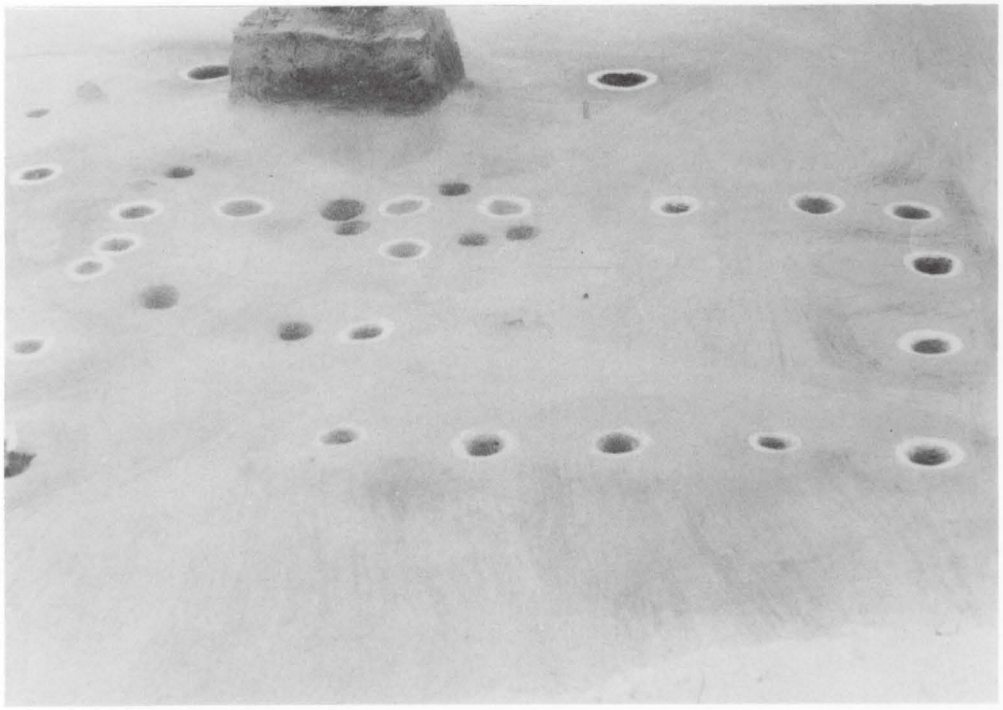
深掘り断面

図版 4

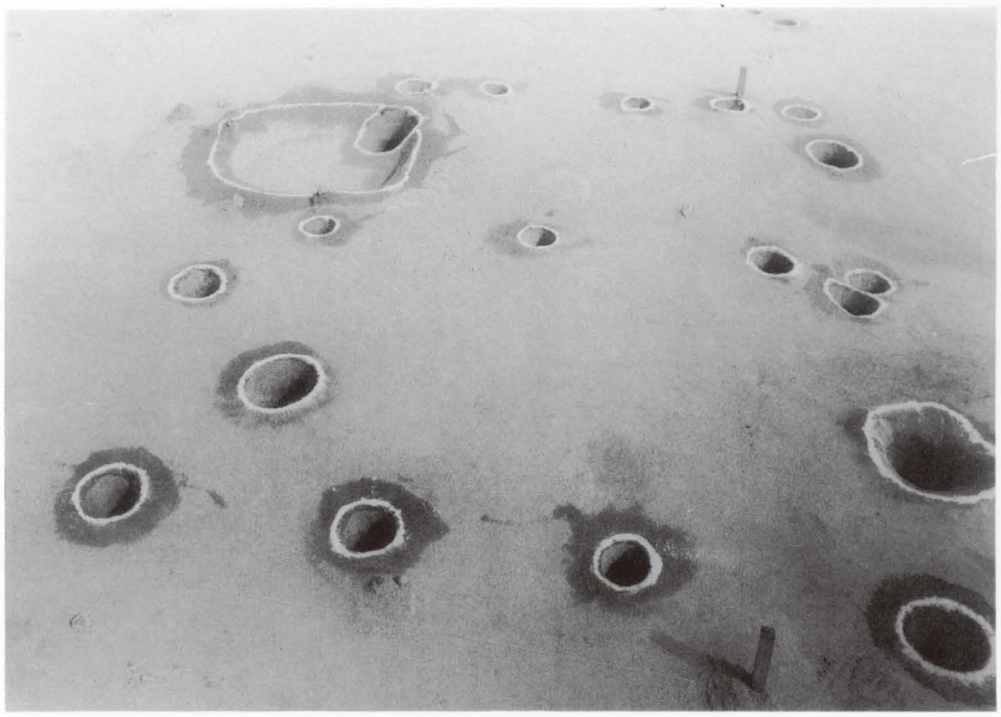
1 号掘立柱建物跡



2 号掘立柱建物跡と 1 号高床倉庫跡



3 号掘立柱建物跡

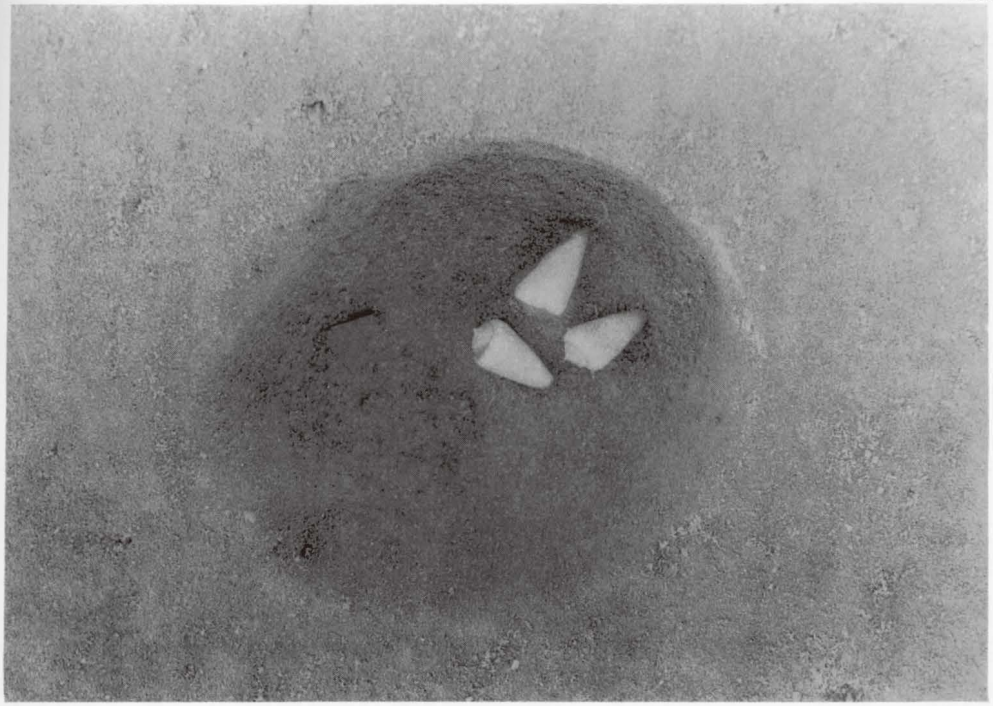


4 号掘立柱建物跡

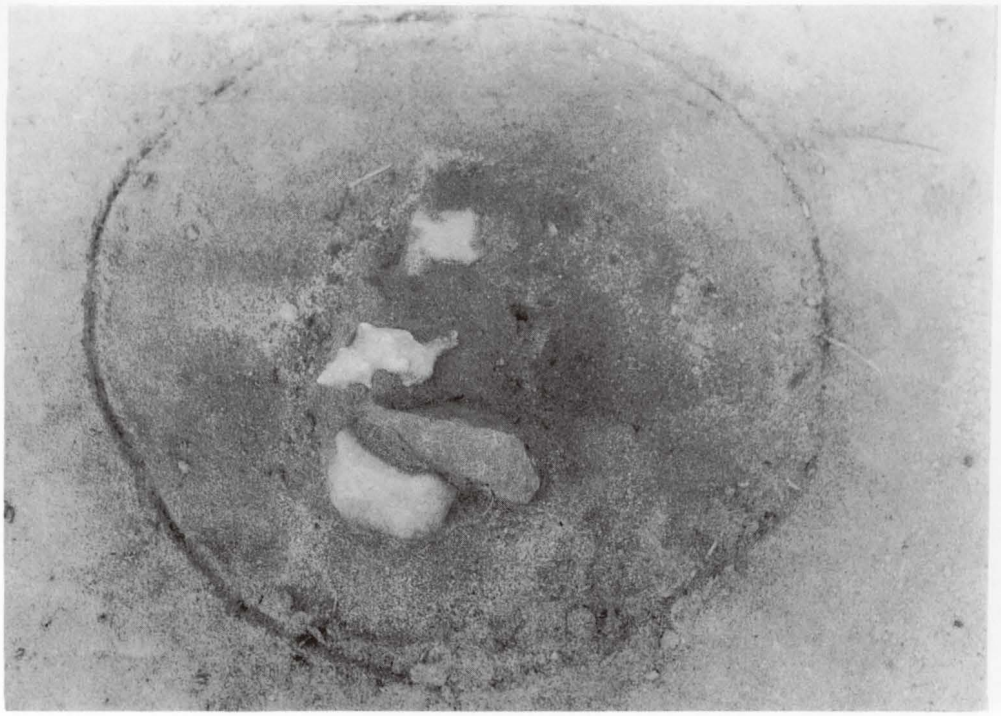
図版 6

2 号高床倉庫跡検出状況

3 号高床倉庫跡

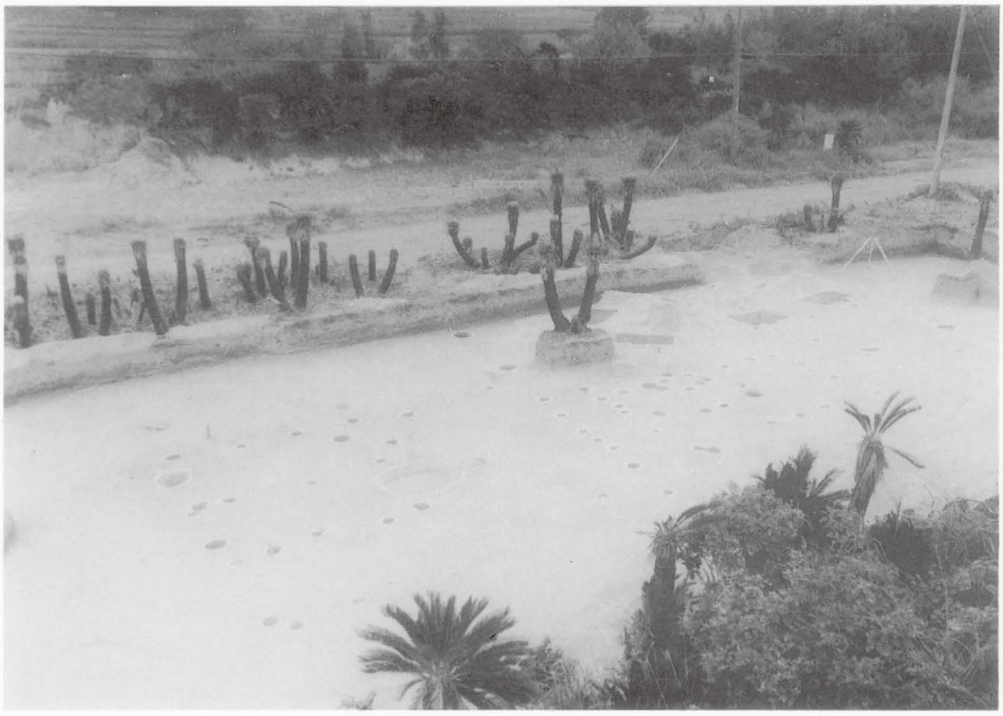


ピット内の貝



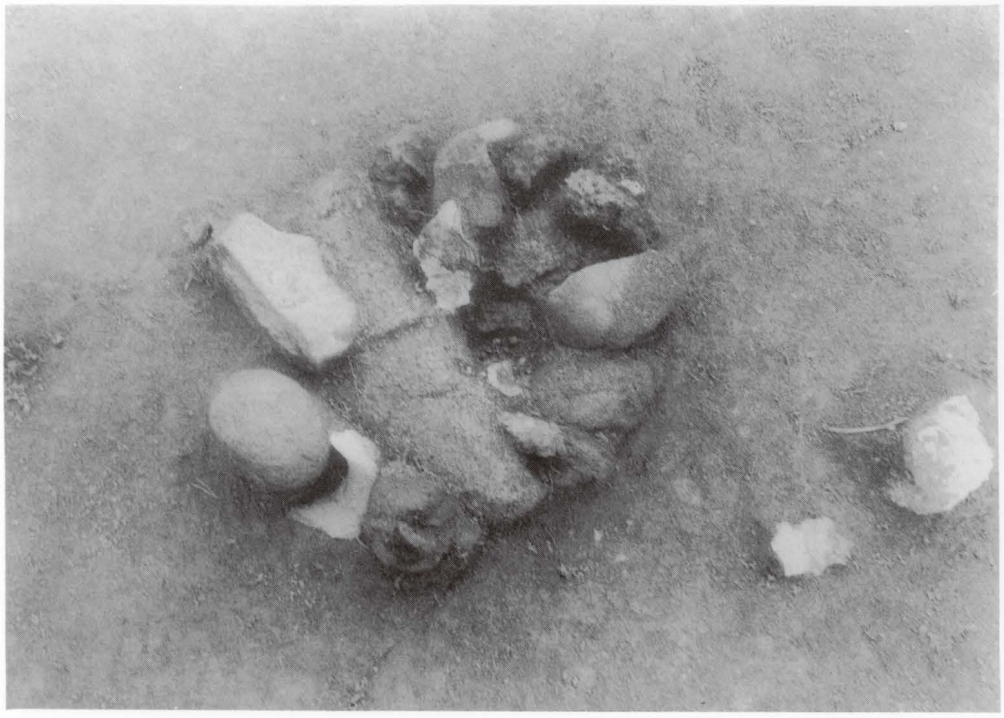
高床倉庫ピットの貝と礫

図版 8



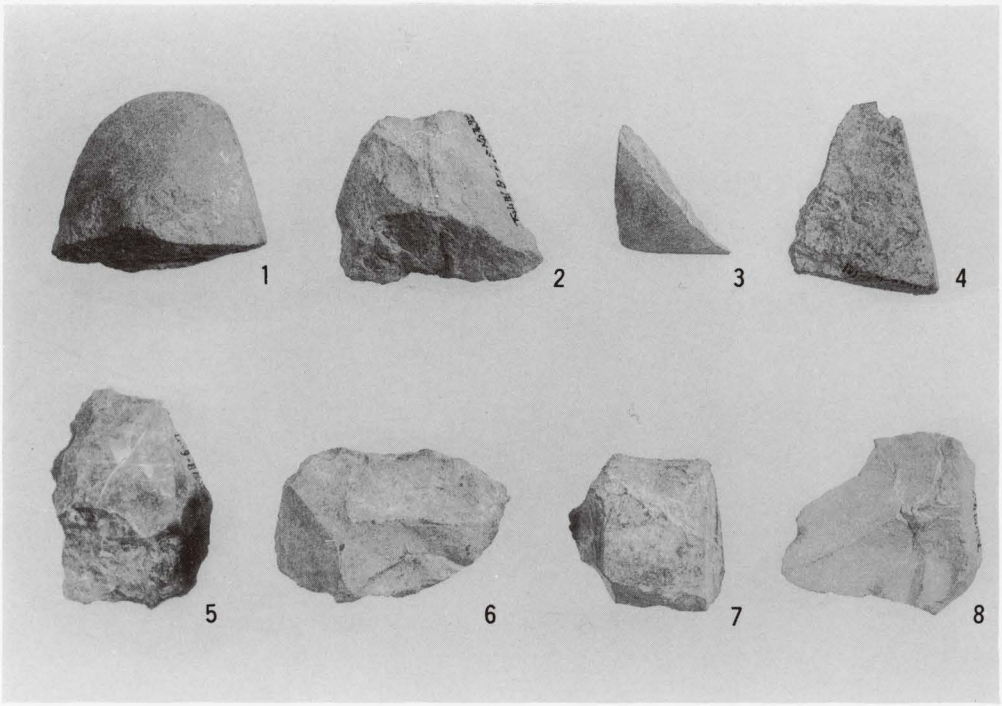
建物跡群

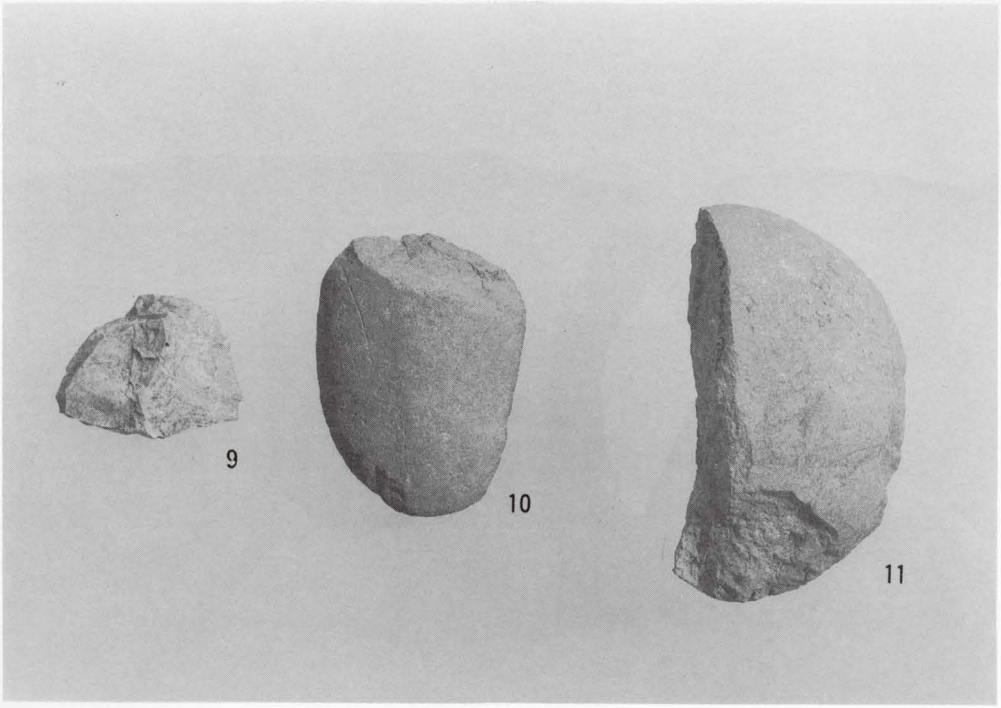
製鉄遺構検出状況



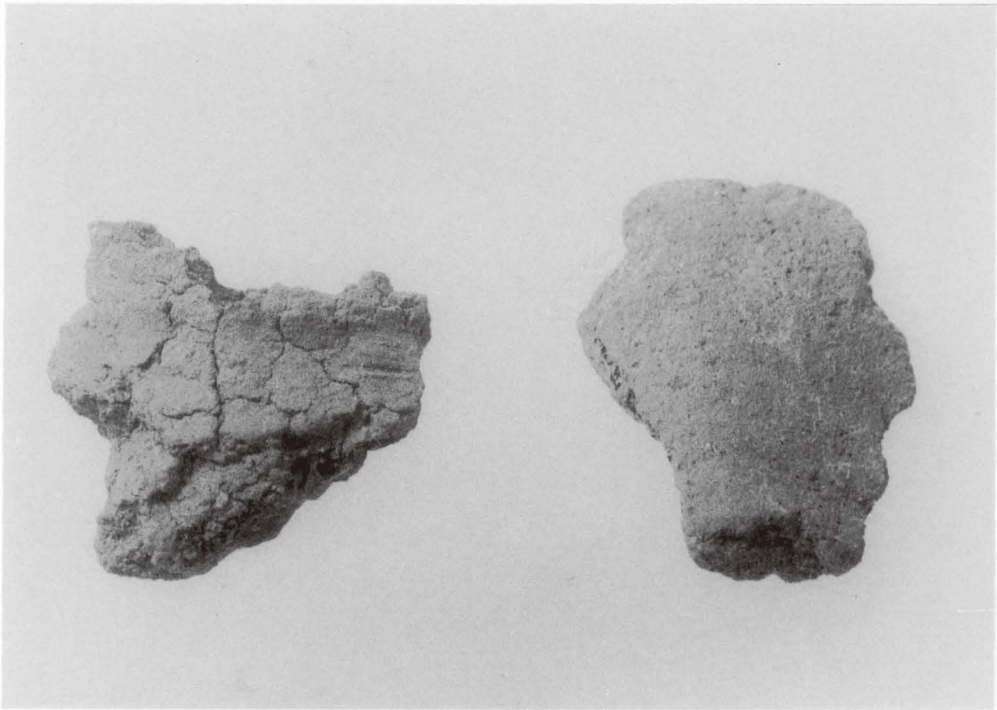
遺構掘り下げ状況

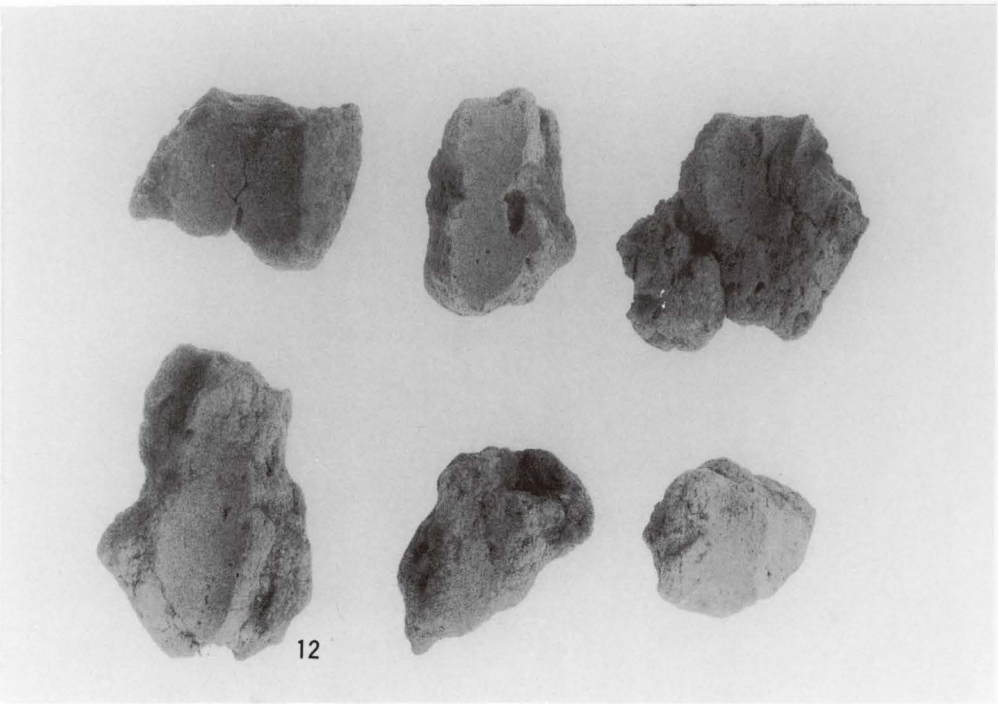
図版10





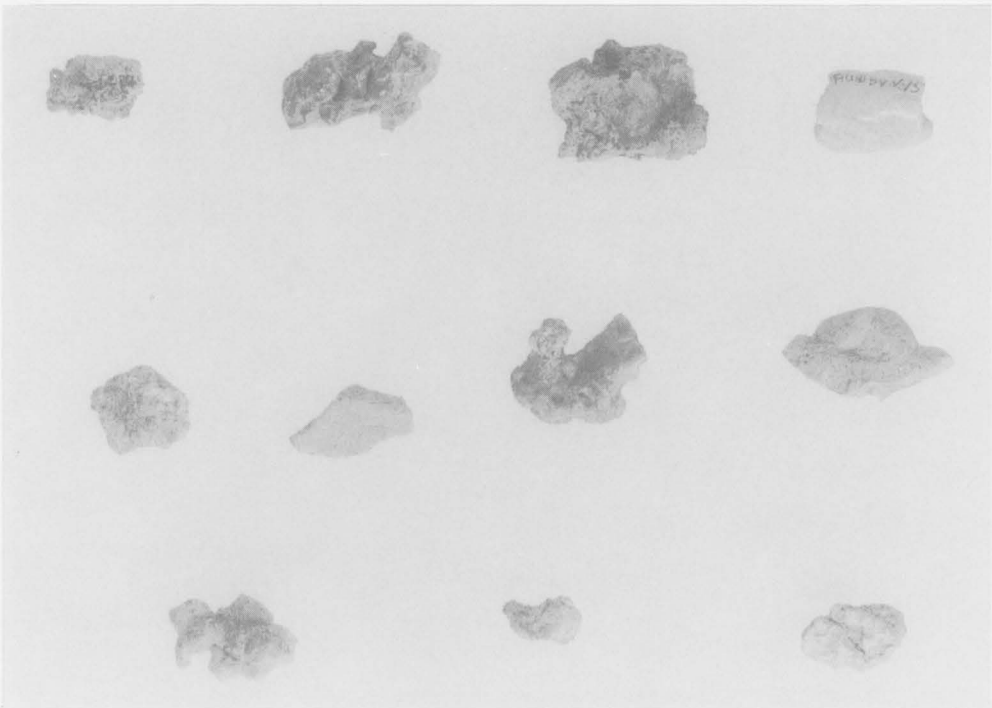
縄文時代の石器



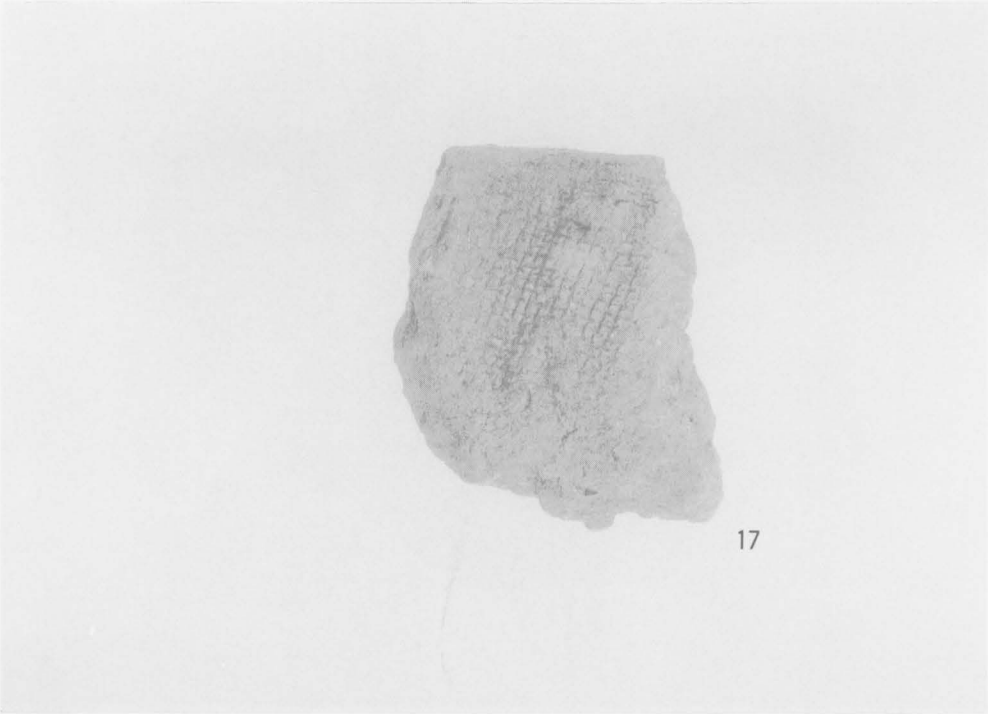


フイゴの羽口

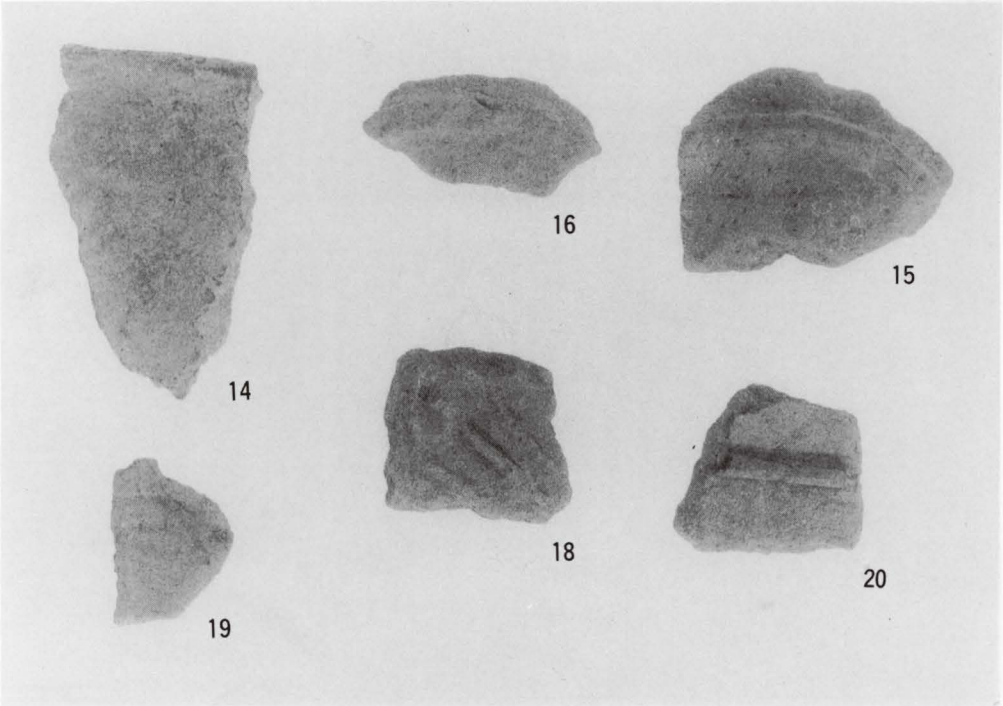
図版12



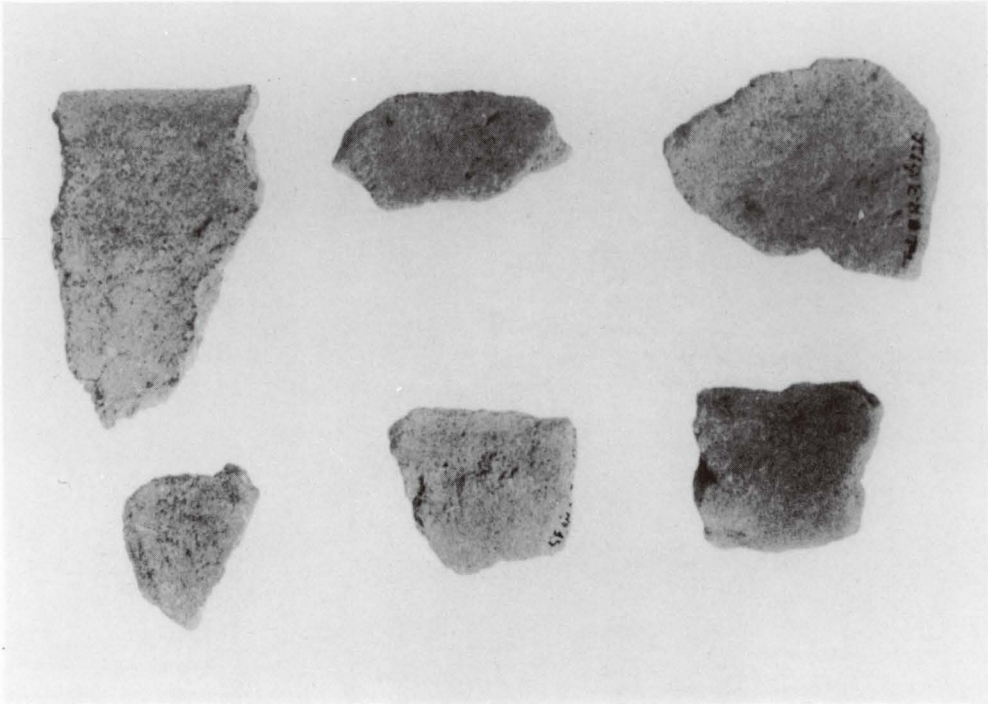
鉄さい



布目圧痕文土器

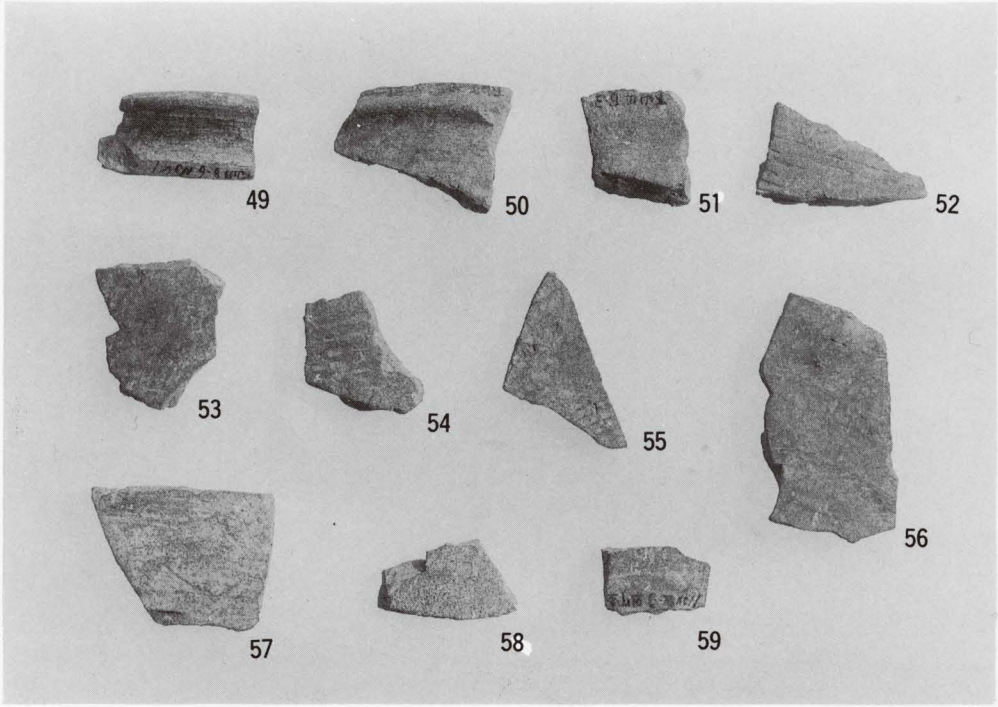


出土土器

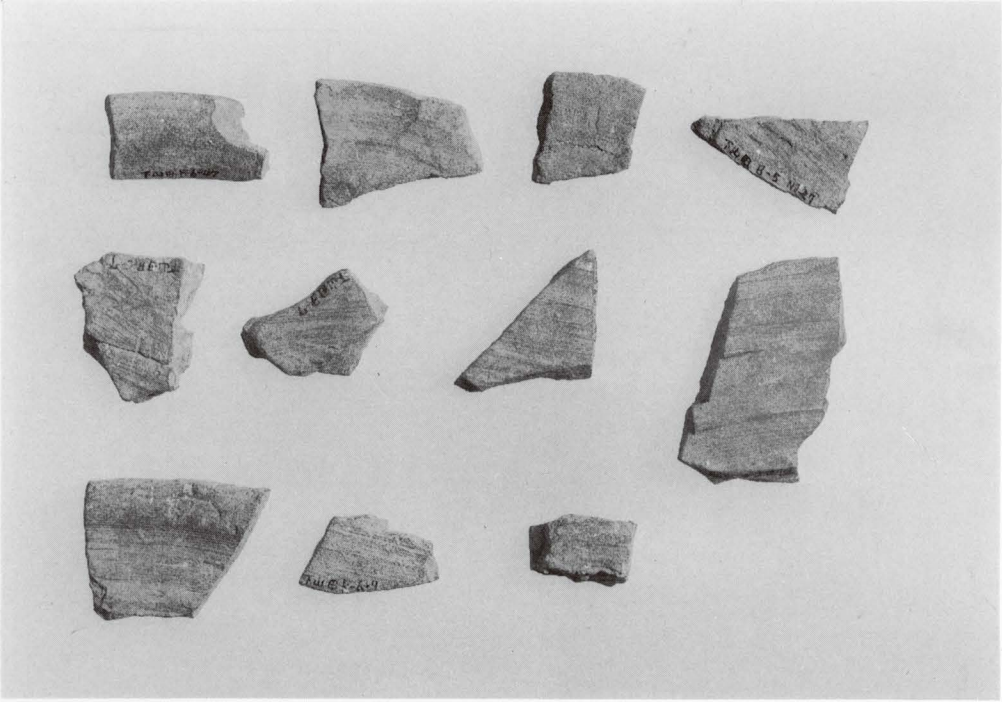


裏　面

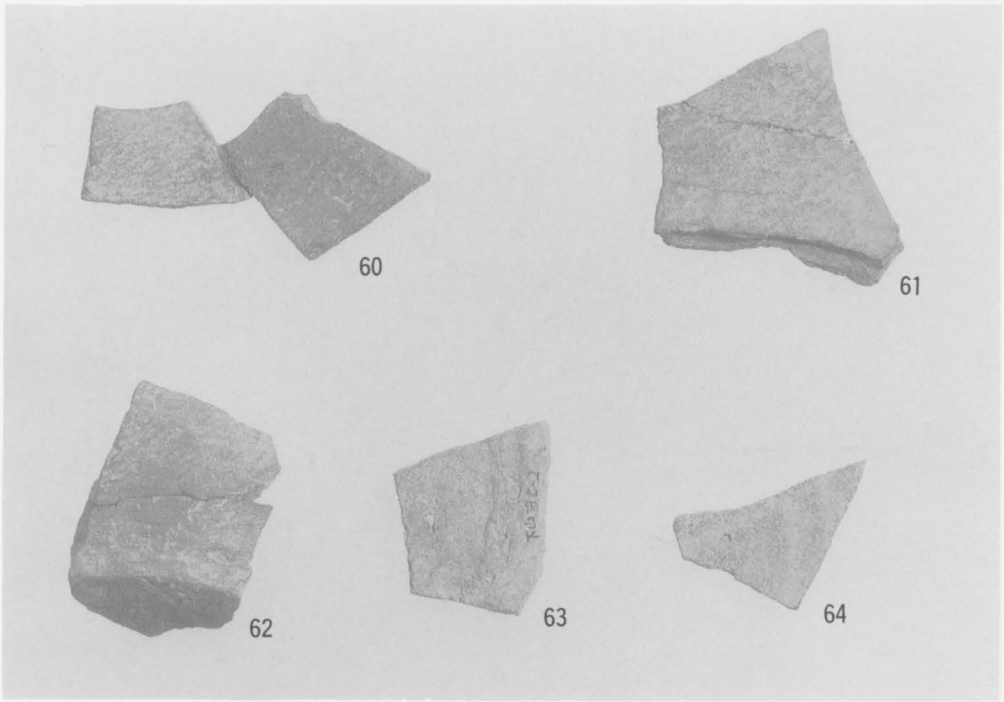
図版14



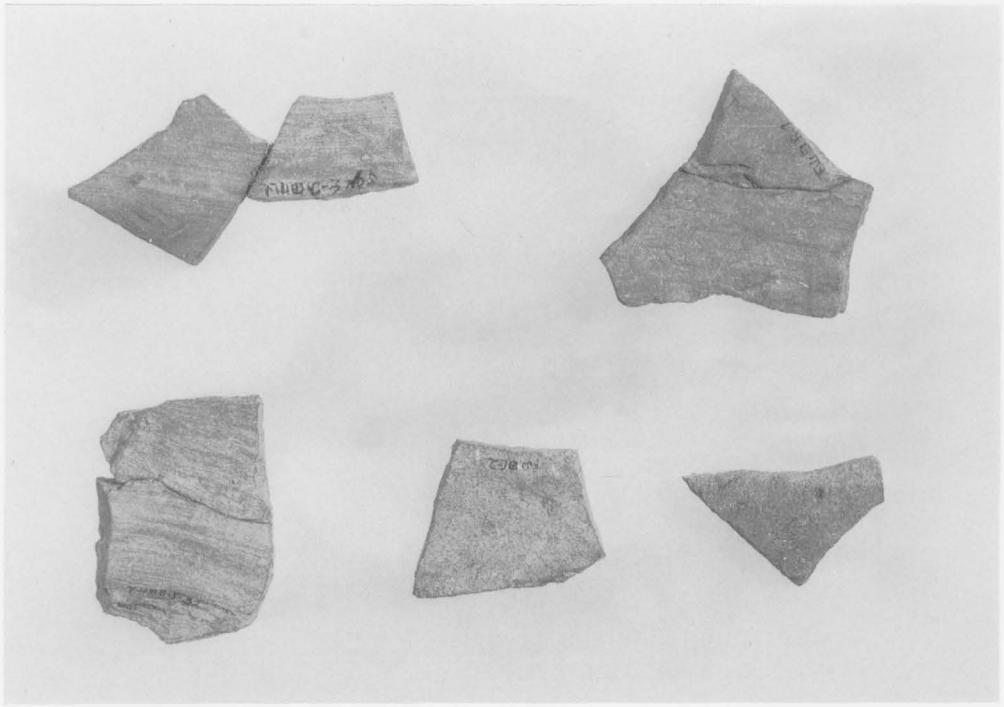
出土類須恵器



裏　面

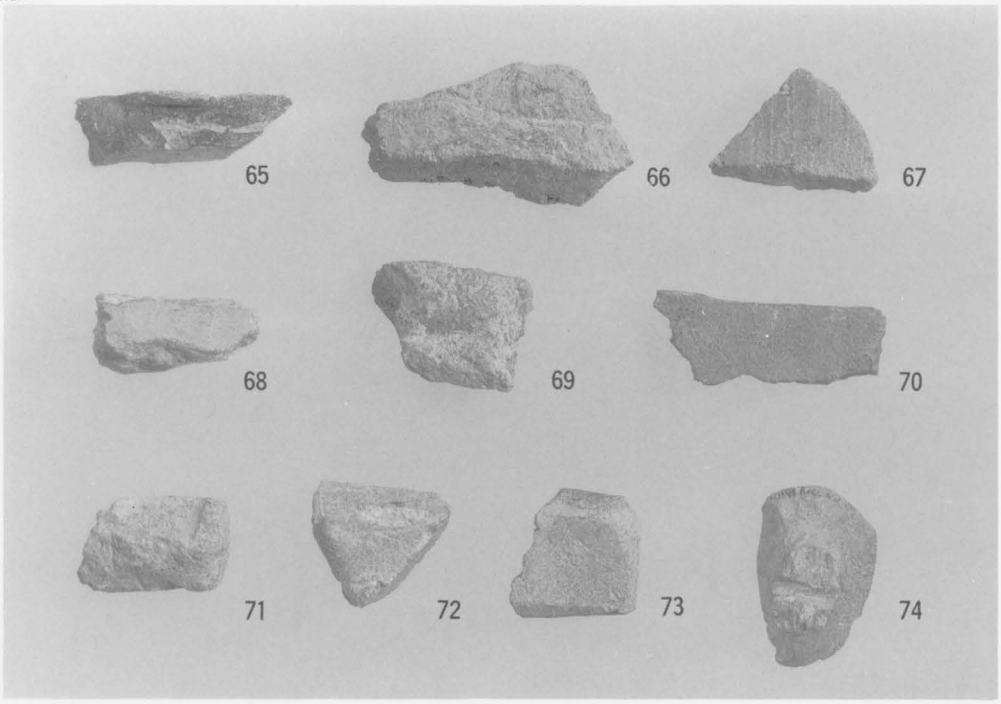


出土類須恵器

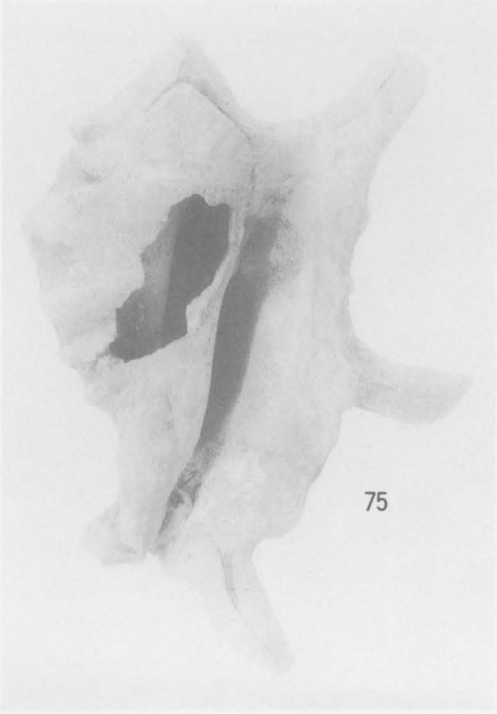


裏　面

図版16



滑石製品



貝　器

調査風景

あ と が き

下山田Ⅲ遺跡（東地区）は，頭初我々が予想していたような古い遺跡ではなかった。と言うのも道路の西側に位置する下山田Ⅱ遺跡では，縄文時代の土器や骨角器などの遺物が多量に検出されており，しかも西から東にかけて傾斜している状態で出土していた。そのうえ今回の調査区域の北側断面には，黒褐色砂層のあたかも遺物包含層と思われるものが露出していた。

こような状態と西地区（下山田Ⅱ遺跡）での遺物の出土状況が深く脳裡に焼き付けられ，砂丘の形成を忘れていた。

発掘調査を進めても出土するのは，類須恵器などでほとんど新しい資料ばかりであった。それでもその下には西地区で出土したような遺構・遺物が出土するかも知れないと思っていた。その期待は最後まで裏切られてしまった訳である。

しかし，奄美で初めての掘立柱建物跡や，奄美・沖縄を含めて報告例のない高床倉庫跡と思われる遺構，それらと同時期と思われる炉跡や製鉄遺構が検出されたのであった。

砂丘上に形成された集落跡という大成果を誰が予想できたろうか。

出土した資料はグスク時代の今後の研究にとって貴重なものになるものと思われる。

最後に，関係諸機関の方々ならびに暑い中汗をかきながら発掘作業に従事していただいた地元の方々，そして笠利町歴民館および県収蔵庫で整理作業に従事していただいた方々に心より感謝申し上げます。

笠利町文化財報告書（9）

下山田Ⅲ遺跡（東地区）

1988年3月

発　行　笠利町教育委員会

印　刷　㈲朝　日　印　刷